

っていました。それが代々このプロジェクトの根本理念として伝わって、ザンビア人によるザンビア人のための大学ができて上がっていききました。

最初に入学した第1期生は13名でしたが、彼らを指導する若い専門家らには熱意がありました。とにかく頑張ってこの大学をつくっていかなくてはならないという感じでやっていいたと思います。私もわずか3か月の任期ではありましたが、こういう気持ちでやっていました。

ところが不幸なことに、その後この13人のうちの4〜5人がエイズで亡くなってしまいました。当時、日本にきた4〜5人の留学生の中でも2人が亡くなりました。

教育体系の果実である学生に教える楽しさ

私は鶏の病気の専門家なので、学生に対しては英語の教科書の中から必要な図などを配って説明をしていました。当時ザンビアでは鶏の病気に関する意識が低く、病気で死んだ鶏でも普通に食べていました。彼らにとっては貴重な栄養源なのです。感染症が流行して、鶏が死んだと聞いて現場に行くと、ほとんど食べられた後だったということもよくありました。



獣医学部内の実験室の様子

獣医を育てる大学なので、学生は鶏の病気だろうと犬の病気だろうとそれなりに知っておく必要があります。いずれ大きな養鶏場等ができたときに、そこで働く獣医たちがしつかり知っていないければいけないので、私は彼らに熱意をもって伝えました。それが「教育」というものですから。当時は、産業を育成するためではなく、教育のために、私たちはアフリカのザンビアまで行ったのです。

家畜の病気の中には人に伝染するものもあります。例えば鶏から人間に伝染して人間が下痢をおこすくらいの病気はいくらでもあります。中にはもつと恐ろしい病気もあります。例えば死んだ家畜の肉を食べた人が感染して死ぬという、炭疽症たんそのような恐ろしい病気もいくらでもあります。そういうものを獣医は確実に知って

いなければなりません。その次のステップとして、獣医がそういう病気をコントロールしながら、地域の農家に教え伝えることを視野に入れて、教育をしました。

大学の先生の仕事は楽しいものです。教育体系からいえば、大学の先生は幼稚園、小学校から一生懸命育ててくれた先生方から学生を受け取って、最後の一番いい果実をもらうようなものです（笑）。

ザンビアでの3か月の任期終了前に、1人でバスに乗って2泊くらいでビクトリアの滝に行きました。実験動物関係の器具・機材を扱っているイギリス人に連れられて、ザンベジ川のほとりでキャンプしたこともあります。とても感激しました。星があんなに美しいものだとは、北海道暮らしの長い私ですら思いませんでした。

ザンビアの経験を踏まえ、JICAの多くの獣医学プロジェクトに関わる

ザンビアのプロジェクトに行った後、東京大学の教授をしていた時代に、アルゼンチンの「ラ・プラタ大学獣医学部研究計画プロジェクト」に行ったことがあります。そのときも橋本さんがたまたまアルゼンチンのJICA事務所員として来ていました。私は国内委員会の

委員長としてラ・プラタのプロジェクトを進めていたのですが、その際に参考としたのがザンビアのこのプロジェクトでした。ザンビアで失敗だと思ったことは、ラ・プラタでは絶対にはやってはいけないと思っていました（笑）。

アルゼンチンはもともと学問的にも高いレベルにあるので、アフリカと比較するのは無理がありますが、プロジェクトの持っている方はアフリカであろうと南米であろうとそれほど違いはないと思います。ザンビア体験があったおかげで、ラ・プラタのプロジェクトはともうまくいきました。こちらでも続いています。

ラ・プラタのプロジェクトでは、学生に日本に来てもらい、日本でトレーニングをして学位を出して、本国の大学に戻し、彼らを中心に大学の運営をしてもらうという仕組みです。最初からのこの目標が定まっています、そのとおりにうまくいきました。ラ・プラタの獣医学部長もプロジェクトの卒業生です。お金は決して潤沢ではなかったのですが、橋本さんや多くの人に助けられて、現地の人々が資金を稼いでプロジェクトを自立させる道もつくっていききました。当時南米トップクラスの電子顕微鏡を使った実験を請け負ったほか、日本から送った優秀なラットやマウスなどのねずみを繁殖させて資金を稼いだようです。

東大退官後に行った帯広畜産大学では、「モンゴル・家畜感染症診断技術改善計画プロジェクト」にも関わりました。偶然にも獣医系大学が関係したJICAのプロジェクトには全

部関わることになりました。モンゴルのプロジェクトでは研究所が対象で、学部生対象のザンビアや若手研究者対象のアルゼンチンとは違ったのですが、これらの経験がとても役に立ちました。

ザンビアからアルゼンチン、モンゴルなど、様々な国際プロジェクトと関わったのですが、私にとって国際協力はボランティアのような感覚でした。日本はこういう技術協力プロジェクトが「国際協力だ」といって関わっていきませんが、私は自分の専門でたまたま他の国の人たちと仕事が出来ただけだと思っています。

また、これまでいた大学では、たくさんの留学生たちと接してきました。色々なプロジェクトを通じて、多くの人が日本へ研修に来ています。例えば帯広畜産大学がやっている研修プロジェクトでは、年間10名で10か月の受け入れをしています。もう10年以上続いているから、相当な人数になるでしょう。

JICAのプロジェクトで帯広畜産大学へ留学して、一旦本国に帰ってから今度は自国のお金でまた日本に戻り、再度研究を続けている中国の人たちもいます。東大農学部獣医学科はアルゼンチンの学生を何人も受け入れています。私のいた獣医微生物学研究室ですら4、5人いたくらいです。

留学生と接する際に特に心がけていたことはなく、日本の学生とすべて同じように接して

いました。特別扱いは全くしていませんでした。

ザンビア大学ではフェーズ2までの段階で、ザンビア人の教官が21名（留学中の教官を含めると34名）になりました。もちろん今はもつと増えています。卒業した獣医師がフェーズ2までの段階で145名です。これはとてもすごいことだと思います。私の赴任時には、家畜保健所とか地方の獣医さんたちはほとんどが外国から来た獣医さんたちでした。ザンビア人の獣医さんはほとんどいなかったのです。

教育分野のプロジェクトなので、やがてはそうなるとは思っていましたが、「ザンビアナイゼーション」がこうして着実に実現できています。門平睦代専門家（疫学）や佐藤輝夫専門家（臨床病理学）など、多くの方ががこのザンビアの案件に携わり、情熱を注いだ結果が今日のような成果となっているのでしょう。

時代は変わり、今はどこの大学でも獣医を志望する人たちが増えています。北海道大学の場合は、年によっては医学部より難しい状況すらあるようです。コミック『動物のお医者さん』以来、女性の志願者が増えたのも要因でしょう。やはり女性はよく勉強するし、女性が集まるところでは、男性も一生懸命努力しますから（笑）。

JICA 専門家に不可欠な資質——威張らないこと。
相手の良いところをいち早く見つけられること。

どんなプロジェクトにせよ、相手を教育するようなプロジェクトでは、一生懸命にやれば、きつと相手もこちらを理解してくれるものだと思います。しかしプロジェクトに合わない人も間違いなくいます。それは威張る人です。特に相手に対して威張る人、こういう人はだめでしょう。大した技術もなく、といったら怒られるかもしれません（笑）、コミュニケーション・ギャップが大きいのもかもしれません。重要なのは相手のいいところをいち早く見つけること。人間はみんなそれぞれいいところを持っているものなのです。

技術協力とは、日本に対してシンパシー（共感）を持つ人をひとりでも多く育てていくことだと思えます。それが直接経済的に結びつくかどうかは関係ありません。「日本人が好きだ」と心から思ってもらえるのは、とても重要なことだと私は思っています。

私は子どもが3人いるのですが、そのうちの1人はやはりJICAのプロジェクトに関わっていました。その娘は日本語教育で協力隊に行っていましたし、義理の息子も協力隊員でした。義理の息子は北大の畜産を出てタイの奥地に行つて、畜産振興のような活動をしていたよう

です。結果的には協力隊が縁で結婚しました。義理の息子は、帰ってきて地域医療に目覚めたと言って、長崎大学の医学部に入りなおして、今は医者をやっています。

娘が青年海外協力隊（JOCV）を受けて、外国に行くことを何の躊躇ちゆうちよもなく選んだのは、私たち夫婦を見てきていたからなのでしょう。自分もやってみたいという思いが、ごく自然に湧いてきたのだと思います。

私は特に国際協力をやったという感じを持つてはいません。隣の町に行って仕事をやったくらいの感じですが、それがたまたま日本ではなかったというだけです。

これからも「日本人が好きだ」という人を、ひとりでも多く増やしていけたらと思っています。・・・」



ザンビアの地方農村の風景



ながばやし としひこ
長林 俊彦 氏

担当分野：細菌学（フェーズ2）

1942年石川県生まれ。北海道エコ・コミュニケーション専門学校講師、天使大学看護栄養学部栄養学科非常勤講師（公衆衛生・食品微生物学）。北海道大学獣医学部卒業。獣医学博士。北里研究所付属家畜衛生研究所研究員、1974-76年米国National Fish Health Research Laboratoryで水生動物のウイルス感染症の研究に従事。1978年北里大学水産学部講師（微生物学）となり、岩手大学、岐阜大学、鳥取大学農学部非常勤講師を兼務。1991年岡山県環境保健センターに微生物科長として勤務。1992-94年JICA個別長期専門家としてインドネシア沿岸養殖研究所、1994-97年ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト、1998-2000年モンゴル家畜感染症診断技術プロジェクトにJICA長期専門家として技術協力に従事。

現地と日本の事情は違うので、スタンダードを充足するにはどうしたらいいのかと現地で考えることが必要だと思います。日本のやり方をそのまま踏襲しては駄目なのです。

ザンビアで行われてきた「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト（フェーズ2）」で、細菌学分野の専門家として、1994年から現地に派遣されていた長林俊彦氏。

北海道大学を卒業後、長林氏はアメリカでの研究活動を経て、赴任当時は北里大学水産学部で微生物学の講師をしていた。微生物学の中でも、特に水生動物のウイルス学というジャンルを専門としていた長林氏は、どのような経緯で、アフリカで2年半の活動をするようになったのだろうか。

その後、モンゴルのプロジェクトにも専門家として赴任し、現在は北海道エコ・コミュニケーション専門学校講師、天使大学非常勤講師も務める長林俊彦氏のザンビアでの思いと挑戦を紹介してみたい。

微生物学への興味から獣医の世界へ入り、そしてプロジェクトへ

「・・・私がまだ小さかった頃は、赤痢など様々な細菌の感染症が問題になっていた時代で、お医者さんも困っているという話を聞いたときに、微生物は面白いよと周囲の人たちが言っていた記憶があります。

高校時代から私は微生物学をやるうと思っていました。ただ、大学の医学部ではあまり基礎微生物はやりませんし、農学部も応用微生物なので、あまり基礎微生物をやりません。最も基礎微生物を扱うのが、実は獣医学部だったのです。私の時代には、獣医学部は北海道大学にしかありませんでしたし、私が北海道大学に入る頃には、ちょうど日本でもウイルス学が活発に研究され始めていました。そのため、私は北海道大学に入学しました。

もともとは、獣医たらんとしていたこともあるのですが、臨床獣医は他の人よりも才能がなければとても務まらないと思います、その道には進みませんでした。ただ、私たちのような仕事をする場合、獣医師資格は必須条件です。色々な場所で研究をするにも、獣医師の資格がないと研究職をさせてもらえません。そのため、単位をきちんと取って、国家試験も受け、獣医師の資格を取得しました。

基礎微生物学と言っても色々な動物種があるので、私は学生時代から色々な動物に接して

いました。当時は若かったので、まだ日本では誰も手をつけていない脊椎動物せきつういのウイルス生態学のような分野を研究しようと思い、水生動物のウイルス学の道を選びました。

北海道大学を出て研究をやり始めてしばらく経ったときに、水生動物のウイルス学は、日本ではまだやっている人がほとんどいなかったもので、アメリカへ行かせて頂く機会がありました。

水生動物のウイルス学をやるにはアメリカが良いというアドバイスをもらい、アメリカで足掛け3年ほど暮らしていました。

帰国後は、北里大学の水産学部で教員をやりました。専攻は微生物学だったのですが、水生動物のウイルス学をやっていたので水産学部にいたのです。ザンビアに派遣される直前は、岡山県の環境保健センターで仕事をしていたこともあります。

ザンビアへ行かないか、という話をもらったのは、北里大学での教員時代でした。

当時アフリカに長期で行くのは大変なことだったのでは、とよく言われるのですが、私はそんな風に考えたことは全くありませんでした。自分の専門を使ってくださるところがあるのなら、それはそれで良いことではないかと思っていたのです。実は先輩たちが国内支援委員会にいて、断れなかったのですが（笑）。このプロジェクトに参加できたことは、とても良かったと思っています。

獣医学の世界には、インターナショナル・スタンダードというものがあり、そのため日本の技術を移転するというよりも、自分たちの教育内容をそのスタンダードに合わせられるかどうか、ということが赴任当初は心配でした。例えば微生物学だったら、「ここからここまでは知識としてカバーしなくてはならない。そしてこういう実習もカバーしなければならぬ」というレベルがあつて、外国へ行つたとしても、当たり前前にそのレベルで教育をします。ただ、赴任後、そこに合わせられるかどうかという懸念がなくなつてからは、ザンビアでの仕事に特に難しさを感じなくなりました。

あの当時は、自分の手足とそこにあるものを使って色々な仕事をやっていくのは当たり前でしたが、ザンビアのように全く何も無いところでやるというのは初めてで、大変勉強になりました。国内支援委員会などから、「お前は力足らずだったよ」と言われるのが怖かったです（笑）。それ以外の心配は全くありませんでした。

まず英国式の教育システムに慣れる

ザンビアは英国の植民地だったので、高等教育の水準維持のための大学の教育方法もイギリス式でした。このプロジェクトが始まった当時はアイルランド人や英国人が学部長としてマネジメントをしていたこともあって、獣医学部でも学外試験委員（External examiner・試験の評価や学位授与の判定に関して、他の高等教育機関から審査員を招いて試験審査委員会に加え、出題の適切性や評価の妥当性などについて審査を行う）の制度がとてもしっかりしていました。

決められた学年では必ず学外試験委員が来て、その学年の試験を全部受け持ちます。学年の初めに授業計画（Teaching program）やシラバスをつくったり、テキストや資料をアレンジするのが大変なのですが、学外試験委員にぶつかるときには学年の初めに試験問題を一緒に送っておきます。そして1年経ったときに学外試験委員が試験問題を持ってきて、色々なディスカッションをするのです。学生の試験をやって、点数を付けた後にこちらで記録をとって、その試験用紙をそのまま学外試験委員に送ると、彼らが答案を見て採点をするのですが、そのときに問題の配点区分は連絡しません。向こうは向こうで質問を見ながら採点をしていくのです。

2年半の間で、向こうが採点した点数と私が採点した点数はほとんど違いがありませんでした。このような試験問題ならこのくらいの配点だなというのがお互いに分かるのです。微生物学なら微生物学で不足があれば、それでは教育内容として足りません、と言ってきましたし、もしも何も言っていなければそのまま進めていくことができるのです。学外試験委員は、学生の試験の点数を付けるとともに、教員の評価もするのですが、そうした評価も経て、インターナショナル・スタンダードとの比較に対する不安はだんだん薄れていきました。このシステムは不思議だと思われるかもしれませんが、実は日本から学外試験委員として参加している方がたもあり、知り合いにもいました。

学外試験委員のおもしろさは、インタビューや実習のとき、「あなたは何でそんな質問をしたんだ」と、もし疑問点があれば生徒がいなくなつた後に聞くことができます。お互いがお互いをよく見ていて、個人的にはおもしろかったです。

もちろん、学外試験委員は試験のときにだけやって来ます。交通費があまり出せないのです、英国から呼んだことはなく、ケニアやタンザニアなどのプロフェッサーが来るのです。白人も来たことはありますが、アルジェリアならアルジェリア人など、多くはその国の人が来るシステムです。試験をしてもらうので、学外試験委員の日常や出張費は全て呼ぶ国が持たないといけません。そのおかげで、ザンビアの獣医学部で獣医師免許を取ったら職場として南

アフリカを選んでもいいし、本当は英国を選んでもいいのです。ただ、実は英国は専門職を入れたがりません。その代わりに違うコモンウェルス（英国連邦）諸国に行きましようという話をするのです。就職をするところがあるのだから、声をかけられた学生たちは「はい」と言いやすいのです。あれが植民地政策のノウハウなのでしよう。

コモンウェルスというのは最初からそういう約束で出来ており、どんな職種でも資格は全部使えるのです。ザンビアで取った資格は、コモンウェルスで全部認められます。私がいいた終わりの頃には、南アに学外試験委員としてプロジェクトからも行っていた人がいたのですが、南アフリカの先生もザンビアと単位の互換性を考えたいという話をしていましたよ



典型的なザンビアの地方道路の風景

です。

そのように、他の国からも注目されていて、「うちの学校のこの学部と単位の互換性を持たせたい」と言ってきた人がいたのは、ある意味でこのプロジェクトの成果の一つとも言えるのでしよう。

プロジェクトが上手くいくための努力——定期的に会議を行い、言うべきことをきちんと言おう

私がザンビアに行くとき、プロジェクトを一区切りつけるため、フェーズ2で収束させるように、ということになっていたのでありますが、どういうわけか少しもたしていたところがありました。多田さん（多田融右国際協力専門員）は当時、一番若くしてチームリーダーになるということでしたので、私はそのためにも事前にも現地の先輩がたと調整をしておく必要がありました。北海道大学出身の私は、その先輩のかたちとも皆知り合いだだったので、ざっくばらんに対応ができました。年齢もそれほど離れていなかったので、言うべきこともきちんと言えました。

また、JICAはザンビア大学の獣医学部を南部アフリカの拠点校にしようと思っていたようで、そのために拠点校にふさわしい水準になるようにするにはどうしたらいいのかを考えるようにということでもあったと思います。獣医学部の10周年記念のときに国際会議をやったのですが、声を掛けた各国参加者は色々な発表を持って来るので、ザンビアの獣医学部でもいくつかの研究を出さないと、ということになりました。しかし、このときは結果的に対応できたものはほとんどありませんでした。そういうところがなおざりになっていたので、「あなたはここが悪いよ」とか、「ここは良いけれど、このやり方はおかしいのではないかと、活動が良くなるために、必要なことを会議できちんと言うことが私に求められていたのだと思います。

やはり、向こうでプロジェクトが上手く行ったのは、会議がきちんと定期的に行われていたからだと思います。全学年のスタッフが集まった会議や学部だけの運営会議、プロジェクト会議、また、日本側とザンビア大学側のマネジメントの会議なども行われ、とても風通しが良くなっていました。ただ、それをきちんとまとめていくのは大切な仕事だったと思います。

また、このプロジェクトで良かったのは、JICAの現地事務所に担当者がいて、また、日本には国内支援委員会があって、国内支援委員会とJICA本部・事務所とがとても緊密

に連携していたという点です。専門家の人選には常に国内支援委員会からの助言があり、フェーズ2の頃からは、それが特にきちんと有機的に動き出していました。長期の専門家にはそれぞれ得手不得手があるので、ある分野のところは短期の専門家を呼ぶということと国内支援委員会がきちんと調整してくれていました。

他方、向こうに行って一番困ったのは消耗品がないことで、それは今もあまり変わっていないのではないかと思えます。限られた総代理店のような店に注文するのですが、お金を先に振り込めと言われたり、お金を振り込んだ後に、似ているけれど違うものが届いたりしたこと度も度々ありました。大学教育、特に自然科学系の学部ではどうしても消耗品などが必要になってくるので、あまりタイムラグがないように調達できる方法をプロジェクトとしても探し続けていました。

また、フェーズ2では、北海道大学と同じように家畜病院もつくり、基礎的な検査ができるように動き出したのですが、なかなかすぐ上手くはいきませんでした。しかしながら、そういう検査がきちんと動いていけば、自分たちでお金を稼げるし、自立に繋がっていくのではないかと思っていました。

現場を知ることが臨床医を育てる

多田さんはフェーズ1の最初に関わり、フェーズ2の後半でも関わり、その後、第三国研修を立ち上げるときにも関わっています。さらに第三国研修が終わり、今度は新規のプロジェクトの立ち上げにも関わって、評価でも関わっています。常につかず離れずという感じで、全体を見てきています。一方、北海道大学も学生を夏休みの実習で現地に連れて行ったり、常駐者を今も2名送っていたりして長く関係が続けています。

こうした節目節目に多田さんがいるのは、彼にマネジメントの能力があるからなのでしょう。多分、色々な柔らかな発想ができるのだと思います。適材適所ということで、フェ



ザンビアの地方における牛の放牧風景

1ズ2のときに門平さん（門平陸代専門家）を呼んできたのも多田さんでした。彼女は誰よりもアフリカのことを分かっている、なおかつ日本の獣医学ではまだ確立されていない「疫学」の分野で、アメリカの大学を出ています。

私はよく、門平さんと一緒にフィールドに行きました。私がおもとやっていたウイルスの生態学は、どんなウイルスがどこにいるのかということから分らないとはじまりません。それを解析できるのが、疫学です。例えば、疫学では、コレラ（細菌感染症）がザンビア北部のタンガニイカ湖から雨季の始まりとともに南部へと感染が拡大してゆくことが、経験則として分かっているのですが、湖での菌分布や人々の生活習慣、罹患者りかかんの南下事情などの疫学解析ができれば、手立てはあるのです。

当時、英国人やドイツ人が経営している牧場は青々としていて、ザンビア人が経営しているところは牧草が貧弱でした。これは、疫学的メカニズムが分かり、細菌などへの対処ができていからなのです。そういうところでも獣医さんが一緒にやっていると、牧場運営もきちんとできると思います。日本は衛生学的に特殊な国なので、あまり病気についても気にしないで済みます。けれども、アフリカは昭和20年代の日本よりもっと酷い状態で、おそらく病原菌もたくさんいて、しかもザンビア人の医者は人間との関わりを越えて、公衆衛生や細菌学という部分にはとても手が出せない状況でした。

しかし、臨床医ならばそれができるのです。動物の医者という枠を越えて、疫学や細菌学などの部分を支えられるのはやはり獣医学部なのでしょう。どんな学問も、現場のことを考えないと成り立ちません。

そのような観点から、大学では5年生と6年生の臨床には力を入れていて、牧場と提携をしながら臨床教育をやっています。これらの学生は実際の牧場で定期的に色々な臨床のことを一緒にやっています。ただ、そういった牧場を経営しているのが基本的には外国人であるという問題があります。だから、彼らはイギリスやオーストラリアの獣医さんと呼ばれてはいます。

本来であれば、学校で運営する牧場があつて、それを土台にして現地の牧場ときちんと提携してやっていくべきだとは思いましたが。

関係者とコミュニケーションを図り良い関係を築く

実際に接してみても、ザンビアの学生はとても勉強家でした。初めの頃はテキストがないので、私たちがつくるのですが、つくったテキストを印刷して学生に渡し、講義をしていると、

学生が「配られているテキストにはそんなことは書いていません」「あなたが配ったテキストではこういう言い方をしているのに講義ではこうなっていていいのですか」などと質問をしてきたりします。このように学生はとてよく勉強しているのです。

テキスト類は向こうでつくりましたし、短期専門家の方がたは、ザンビアに来る前にこういうテキストが必要になりますよと話をしておく、きちんと日本でつくって持って来てくれました。私は講義はもちろん、実習もカウンターパートの教育も全部やっていました。カウンターパートというのは、このプロジェクトで誕生した卒業生たちです。当時はもう留学から戻ってきた人もいましたし、まだ戻ってきていない人たちもいました。何人かの学生を政府に雇ってもらい、私の研修室にも2人ほどカウンターパートがいたのです。こういう人たちは私より立派な講義をしていたくらいです。テキストもこちらで用意して、こういう内容でやりましょうという話をして、ディスカッションをし、その人たちにも講義をしてもらっていました。

このプロジェクトでは、現地の行政官の方がたともきちんとコミュニケーションが取れていましたが、多田さんが来てからはもっとしっかりと取れるようになりました。ちなみに、門平さんは語学の天才で、英語だけでなくスワヒリ語もできるしフランス語も何とかなっていました。



豚の外科手術をする学生の実習風景

10周年記念のときに多田さんが推進していたのは、ISBN (International Standard Book Number・国際標準図書番号) の登録ナンバーをつけた獣医関係の雑誌を出すということ、JICAがお金を出してくれて、定期刊行の雑誌をつくりました。創刊号の序文を日本語で書いたら皆これでもいいと言ったのですが、英語に直すことができなかったのです。門平さんがしょうがないなと手伝ってくれたのです。すると、英国人が「あなたがこんな英語を書けるはずはない。これは誰が書いたんだ」と聞きに來ました(笑)。そういう人がいたから、語学は何とかなったのでしょうか(笑)。

私に限らず、このプロジェクトでは他の専門家もカウンターパートと同様に良い関係を築いていたと思います。

ザンビアの後にはモンゴルへ

私は、専門家として2年半ザンビアにいて、戻ってきてからはすぐにモンゴルのプロジェクトに行きました。そのモンゴルのプロジェクトの最終フェーズに来たのも、実は多田さんだったのです。彼はまた、託されて最後の締めに来たのです。クローザーとしてのお仕事。やはり、こうしたプロジェクトでは、クローザーの役割も大切だと思います。

多田さんはそういう意味でマネジメント能力が高い人なのだと思います。最終的にプロジェクトをきれいに終わらせるというのは、やはりすばらしい能力だと思います。

モンゴルの後は、私は専門家としての赴任が困難となりました。私は持病があるため、今ではなかなかJICAは海外に出してくれません。上手くいけば根治するのですが、いまさらもう一回手術を受ける気はありません。結局、北海道大学にお願いをしたらまた講義をやらせということ、天使大学と札幌の専門学校で今は非常勤で講義をしています。天使大学では獣医のこをやっているのではなく、微生物と公衆衛生を担当しています。

今は、もう一度ぜひザンビアを見に行きたいと思っています。このプロジェクトの期間中に、専門家は150人程度がザンビアと日本を行き来していて、協力隊員や調査団で行った方々を入れると200名程度がザンビアを訪れたと思います。ザンビアからは、研修や留学

で12年の間に50名ぐらいが来日していました。イギリスで「アフリカンフイーバー」という言葉があるそうです。一度アフリカの大地の砂を吸い込んだらまた行きたいと思うらしいのです。

北海道大学は確かにこのプロジェクトの基幹校にはなっていましたが、鳥取大学、岐阜大学、岩手大学、酪農学園大学、帯広畜産大学、東京大学など、このプロジェクトには実は全国からも多くの専門家が来ていました。東大の人たちが来たときに、学部の病院が一気にレベルアップしたと感じたことがあります。その人たち自体が、東大ふうでなかったのかもしれない（笑）。

このプロジェクトはJICAと国内支援委員会の連携がとても上手くいっているプロジェクトだったと言えるでしょう。国内支援委員会はリクルートをするときに、本当に良い人たちを選んでくれたと思っています。実際には、断りづらい、先輩の鶴の一声だったと思います（笑）。

現在では、学部長がザンビア人で、微生物を勉強していた第1期生のアロン・ムウイネ（Aaron S. Mweene）という人です。彼は頭も良いし、マネジメント能力もある人です。

JICA 専門家にとって不可欠な資質——他人の修養の助けとなる言行（技術や知識）を示せるという姿勢。

自分の言行に対して、他者が何かを感じ取ってくれればいいなと思っています。獣医学部や医学部や歯学部では、講義をして実習をして、偉いボスになったらマネジメントして、というの当たり前前やることです。ただ、当たり前前やるのですが、そのときのレベルが重要な問題なのだと思います。私も、「それでは足りません」と言われないうちにしようと常に思っていました。

また、微生物学の場合は、教えを受けたボスの口調に似るものです。色々な実験のやり方を見てみると、誰の所にいたのかがおおよそ想像できます。実習でも、獣医の場合は「真似をしてください」とやっています。ザンビアの学生がすごく良かったのは、右手をこうして左手をこうしてということに注意深くきちんと見ていてくれたということです。ウィルスなどを扱うときに、何に注意しながらやっているのかということとは、真似をしてもらえばよく分かります。

私にとって技術協力とは、人生の先輩が技術や知識を次世代に残していくことだと思います

す。それが年寄りの責任というものでしょう。

私は盛んにインターナショナル・スタンダードと言いましたが、現地の国と日本の事情は違うわけだから、スタンダードを充足するにはどうしたらいいのかということとは向こうに行つて考えることが必要だと思います。日本のやり方を、そのまま踏襲しては駄目なのだと思います。

ザンビアについて、もつと国の歴史や政治の話を含めて赴任前の研修で学べていたら、現地でやりやすかったのかもしれないと思います。ザンビアはやはり遠い国なので、行ってしばらくの間は分からないことも多いぶんありました。専門的なことばかりではなく、地政学的なことをもつと頭に入れていたら楽だったという気がします。

ところでこのプロジェクトに「疫学」の専門家を入れたのは、多田さんの大英断だったと思います。「疫学」というのは、他の基礎的な部分を含めて充実してこないと展開していけないような分野ではないのです。獣医の中でも一番の応用なので、日本の最も弱いところですが、それをフェーズ2の終わりにやると決めた、若きチームリーダーがいたことも、このプロジェクトの成功とともに、今後記憶されていくべき事柄なのではないでしょうか。・・・」



はない じゅんいち
花井 淳一 氏

担当分野：業務調整（フェーズ2）

1965年大阪府生まれ。独立行政法人国際協力機構（JICA）農村開発部乾燥畑作地帯第二課長。大学・大学院では畜産及び熱帯農学を学ぶ。1990年にJICAに入団。研修事業部、農業開発協力部、ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト（業務調整員）、JICA筑波、農村水産業開発調査部、JICA中国を経て、2006年4月より現職。中西部アフリカ地域及びアフリカ米生産倍増イニシアティブ（CARD）を担当。

JICAの技術協力の良さは、相手が育つのを傍らにいて待つところにあるのかもしれない。

現在、JICA農村開発部乾燥畑作地帯第二課長の花井淳一氏は、小さい頃からアフリカやアマゾンへの憧れがあったという。大学院では熱帯農学（畜産資源学）を学び、フィールドに出て活躍する先輩たちが現場への思いを熱く語り合っているのを見て、いつかは自分自身もという思いがあったそうだ。やがて、林業調査の助手としてインドネシアのセラム島を2か月間訪問する機会に恵まれる。

待ちに待ったフィールド。

自然の豊かな島で、サゴヤシのでんぶんを主食として、自給自足に近い暮らしを営む人々がいた。このフィールドでの経験をきっかけに、花井氏は実験室を飛び出し、1990年、国際協力事業団（現独立行政法人国際協力機構）に入団する。

そこで出会ったのがこの「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」のフェーズ2だった。プロジェクト最後の業務調整員として、花井氏は何を思い、どこを目指しながら

活動してきたのだろう。心優しい大阪出身JICAマンの在外での挑戦を紹介してみたい。

インドネシアのフィールド調査で途上国の人に関心を持つ

「・・・同じ大学の先輩がJICA専門家でタイに派遣されていたり、同級生がJICAに就職したりと、学生の頃から私はJICAの仕事を見聞きする機会がありました。

大学院に残り、そのまま研究を続けるという選択もあったかもしれませんが、開発途上国の人たちと一緒に仕事をする方が面白いと思って、私はJICAに入る道を選びました。

大学での所属は農学部畜産学科で、その後熱帯の畜産を扱う畜産資源学という講座に進んで、熱帯地域の農業や畜産の勉強をしました。生まれて初めての海外が、フィールド調査で訪れたインドネシアのマルク州にあるセラム島。90年代に宗教紛争が起こった場所です。ダマール（樹脂）採取を生業とする山の民を対象とした調査でしたが、相当に過酷な環境だということで見つからず、体力だけがとりえの畑違いの私にお声がかかったのです。

現地に行ったら「戦後初めて日本人が来た」と言われました。「昔の日本人は残酷だった」と言われたこともありますし、村長の家に泊まっていたらお年寄りが集まってきて日本の軍

歌を歌ってくれたこともありました。

フィールド調査の2か月間は現地の生活にどっぷりと浸かっていました。昼間は山に入つて測量をしたり村の人にインタビューし、夜はケロシンランプの下で彼らとヤシ酒を酌み交わしました。山で採取したダマール担ぎにもチャレンジしました。村で覚えたランサという果物は大好物になりました。村を離れる日の朝、現地で仲良くなったオティスという青年がランサを袋いっぱい抱えて来たときには、本当に胸が熱くなりました。

所属していた研究室は実験中心で、私の研究テーマもラット（ねずみ）の代謝が暑熱環境下でどう変化するかといった内容でした。けれどもフィールドに惹かれた私は、途上国の人と付き合うような仕事の方が自分に向いているなと思いはじめていました。

大学の同級生に、私より3年早くJICAに入った友人がいます。彼とは研究室でもボート部でも一緒でしたが、JICAでは農業系の協力もしているので来たら面白いぞという彼の言葉にも後押しされました。

インドネシアに行くまでは、途上国には自分とは全然違う人たちがいると思っていたのですが、実際につきあってみると実は同じだということが分かりました。知性や人を思いやる心を持ち合わせたとても尊敬できる人もいて、人間として大切なものは国籍や人種、経済の発展度合いとは全く関係がないのだとときに初めて知りました。これはその頃の私には、

新鮮な驚きでした。JICAで仕事をしようと決めたのは、決して途上国の人を助けたいというような気持ちからではなく、こういう人たちと一緒に仕事ができたらいいなという思いからだったのです。

JICAに入り業務調整員としてザンビアへ

平成2年(1990年)にJICAに入ってから、研修事業部で個別研修員受け入れを、農業開発協力部で遺伝資源保存や養蚕関連のプロジェクトを担当しました。

「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」のフェーズ2に関わることになったのは、人事異動の一環によるものでした。機会があれば業務調整員をしたいとは思っていましたが、自らザンビア行きを希望した訳ではありません。当時在籍していた畜産技術協力課が抱えていた案件だったので、その活動についてある程度は知っていましたが、思いがけず当事者になってしまったというわけです。

プロジェクトは、若きチームリーダーの多田さん(多田融右国際協力専門員)がよくチームをまとめてくれているという印象でした。内外に関係者の多いプロジェクトだったので、

着任前から人間関係には気をつけるようにと言われていました。ただ、当時の私はまだ20代でしたので、60代の先生方には随分かわいがあってもらった記憶があります。一方、リーダーを任された多田さんにとってみれば、大時代への恩師でもある先生方に対してリーダーという立場で付き合いなければならなかった、目に見えないご苦労もあつたかと思えます。

先生方はみな真面目で、教育論を戦わせているうちに、本当の喧嘩になってしまうこともありました。「貴様にそんなことを言われる筋合いはない」「貴様に貴様と呼ばれる筋合いはない」とか（笑）。

また、普段は人一倍元気な先生が、珍しく体調を崩されたことがありました。単身で赴



執務中の花井業務調整員

任されていたこともあり、おかゆと梅干を自宅に差し入れました。その後、帰国まぎわになつて「君には仕事で世話になつた記憶はないが、あのときのことだけは一生忘れない」と言われたことを覚えています。

当時のザンビア大学獣医学部では、学部長のラブレス (Cheryl Lovelace) やん (英国人) を始めとする専門家や、インド人、ウガンダ人、ナイジェリア人といった契約ベースの外国人教官が講座主任を務めていました。学部 の 定例会はお国訛りのある英語が飛び交い、まるで国際会議のようでした。

今では珍しい規模の大きなプロジェクトでした。長期専門家は常時6名体制、短期専門家も年間数名派遣され、供与機材が年間5〜6千万円、現地業務費も700万円近くありました。そのせいもあつて、プロジェクト開始以来JICA職員が代々業務調整を務めていました。

プロジェクトに求められた3つの柱―「教育」・「研究」・「社会貢献」

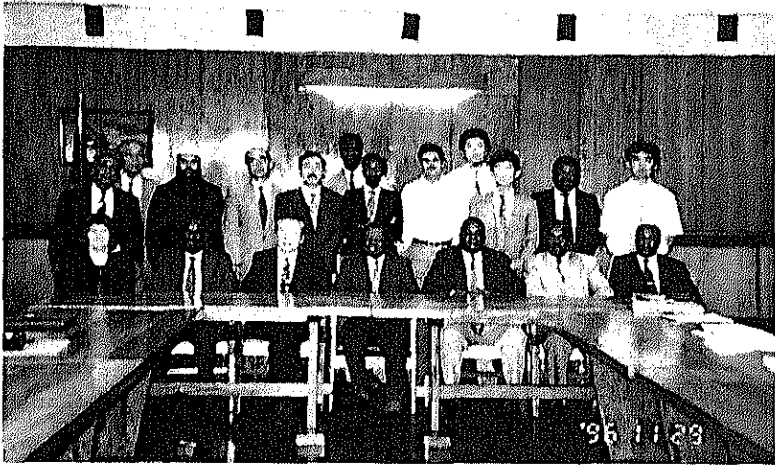
当時ザンビア大学獣医学部に求められる3つの柱は、「教育」・「研究」・「社会貢献」

だと言われていました。中でも一番重要なのは「教育」ですが、フェーズ2が終了する頃には、既に150人くらいの獣医師を輩出していましたし、将来に向けた体制も整いつつありました。

獣医学部の卒業生の就職先で一番多いのは農業省の地方獣医（行政）官です。検疫やワクチンの接種などをおこなっていました。ザンビアでは口蹄疫もそうですが、ダニ熱が問題です。ワクチンがないので、牛を薬液につけるディッピングで実際にダニを駆除するしかなく、その指導も彼らの重要な仕事でした。

それ以外の就職先は食肉会社の検査官などです。ルサカ市内でペットを対象とした獣医師になる卒業生もいましたが、ほとんどの者が牛、山羊や鶏といった産業動物を対象とした仕事に就きました。そういう意味では、このプロジェクトはザンビアの畜産業の発展に大いに貢献したと思います。国立公園の野生動物保護官なども進路の一つでした。卒業生たちは人氣が高く、就職口には困りませんでした。

「研究」も徐々に軌道に乗りつつありました。このプロジェクトでは文部省奨学金を利用して多くの学生が日本で博士号を取得しているのですが、私が赴任した頃には学位を取得した教官候補生らが帰国し始めていました。こうした人材が戻って、研究の体制も整いつつあったのです。



調査団訪問時に大学関係者と（前列左端がラプレス学部長、3人目が金川先生、後列右端より3人目が多田リーダー、4人目が花井業務調整員）

研究に必要な試薬や機材のほとんどはプロジェクトからの供与機材でした。プロジェクト終了後に消耗品をどう補充していくかが大きな課題でしたが、病理鑑定検査等を請け負って収入源ができてきつつあったので、用途は立ちそうな状況でした。

当時のザンビアでは、銅の輸出に依存した経済が行き詰まりつつあり、それに代わる産業として畜産業の振興が期待されました。ザンビアの農業や畜産の発展に大学がどう直接「社会貢献」できるのかが問われていましたが、これについてはまだ見通しが見つからない状況でした。

結果的には、プロジェクト終了後、門平さん（門平陸代専門家）が個別専門家として残り、その後に人畜共通感染症をターゲット

ットにした研究型プロジェクトを立ち上げることになりました。獣医学部立上げへの協力は一区切りとして、パートナーとして共同でザンビアの農業セクターにどう貢献できるかを模索していた時期でした。

後に、第三国研修もその流れの中で始まりました。何らかの形で協力が続いているないと、当面の消耗品の購入もままならなくなってしまうので、日本の資金がある程度入るような枠組みをつくっておく必要性があったのも事実です。この時期には研修講師をできるザンビア人教官も育ってきていました。第三国研修は東南部アフリカ諸国を対称に5年間行われました。初期の研修テーマは病性鑑定 (diagnosis) や病害対策 (disease control) といった分野が中心でした。

徐々に進むザンビアナイゼーション

留学していた教官候補生が戻るにつれ、獣医学部のザンビア人教官の層は次第に厚くなってきました。学部創設以来ずっと外国人だった学部長のポストも、フェーズ2終了直前にザンビア人になっています。ザンビア人として初めて学部長になったのはムソンダ (Munsonda)

Musonda) さんです。私のいた当時の副学部長で、その後任のサムイ (K. L. Samui) さんもザンビア人でした。各講座の主任も外国人から徐々にザンビア人へと移行し、プロジェクト開始当初2名だったザンビア人教官がプロジェクト終了時には21名(留学中の教官らも含めると34名)にもなっています。日本人専門家の役目は、もはや自ら教壇に立つことではなく、ザンビア人教官を指導することが中心になりました。その考えを象徴するのが「ザンビアナイゼーション(ザンビア人化)」というキャッチフレーズだったと思います。

日本の掲げる「ザンビアナイゼーション」という考え方は、次第に他のドナーにも浸透していきました。ただ、一部の外国人教官にとっては自分の職が奪われることにも繋がり、内心複雑だったかも知れません。

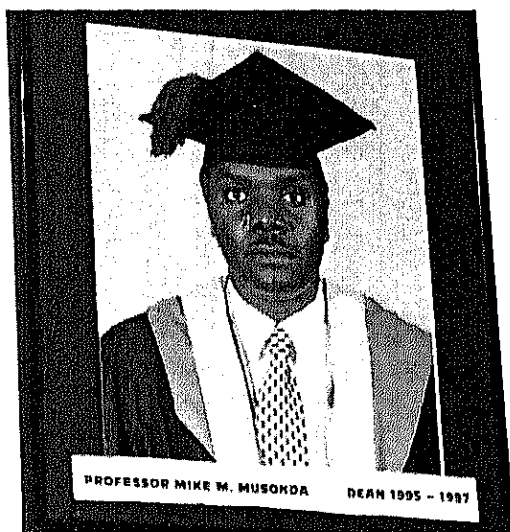
先ほどお話した門平さんは、もともとザンビアで獣医師の青年海外協力隊員でした。ザンビア人の獣医師がいなかった時代で、獣医師は隊員かお雇い外国人でした。それが今ではほとんどザンビア人に置き換わっているので、ザンビアの獣医師界全体がザンビアナイゼーションされたと言えるでしょう。

欧米式ヒエラルキーとプロジェクトの取り組み

ザンビア大学は、旧宗主国である英国の教育制度を反映し、ヒエラルキー（階層意識）が非常にはっきりしているという印象でした。

前任の業務調整員は、獣医だからみんなドクターなのだろうと、教授に対しても「ドクター」と呼んでいたら、「君は何故僕をドクターと呼ぶのか。何か意図があるのか。ドクターと呼ぶのは止めてくれ」というレターが届いたことがあったそうです。教授を呼ぶ際には必ず「プロフェッサー」と呼ぶ必要がありました。

獣医学部には教官を務めるリサーチャー（研究者）の他に、テクニシャン（技官）と呼ばれる人たちがいました。研究者とテクニシャンの



獣医学部内に掲示されているザンビア人で初めて学部長となったムソンダ氏の写真

違いは、獣医学部を卒業しているか否かという点だけでした。実際に実験を行いデータを取るのにはテクニシャンで、研究者がそのデータを分析するという役割分担ができています。日本のように研究者が試験管を洗ったり、試薬の調査をしたりということはありません。ただ実験データの精度が低く、結果として満足の行く分析結果が得られないということが往々にしてありました。将来の教官候補生たちを日本の大学に留学生として送り出す一方で、JICAはカウンターパート研修員として多くのテクニシャンを日本に受け入れました。研修を受けたテクニシャンはその能力だけではなく、業務に対する姿勢も大幅に改善されました。そのことが獣医学部の分析・診断技術の底上げに繋がり、第三国研修実施の土台にもなりました。

恐び寄るエイズの影

当時エイズ (HIV/AIDS) の問題は深刻でした。首都ルサカでは4人に1人がエイズ感染者だと言われていたほどです。現にプロジェクトでもかなりの数のカウンターパートが亡くなっていきます。私が赴任中、ある学生が日本人専門家のところに進路相談に来たことがあります。

ました。食肉会社の衛生検査部門に就職したいのだが、HIVキャリアでも就職できるのだろうかという内容の相談です。法律上はそのような差別を禁止していましたが、実際のところは違ったようです。

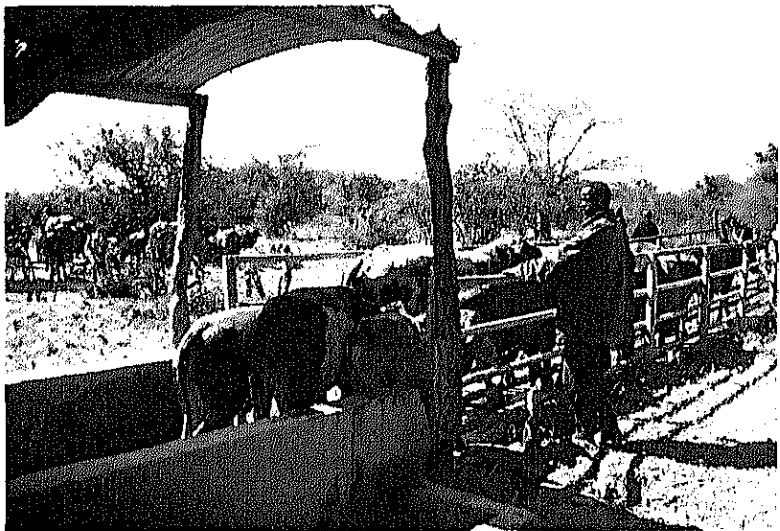
私がザンビアで親しくしていた人が、私の帰国後に亡くなってしまったと聞いたこともあります。現在状況はかなり改善されたと聞いていますが、エイズはプロジェクトにとっても身近な問題でした。

人づくりの原点を踏まえ、自立を促す

怪我をした専門家を南アフリカに緊急移送したり、学生デモに車を壊されたり、他にも様々なことがありましたが、今振り返ってみればいいプロジェクトだったなと思います。そこには人づくりの原点がありました。獣医学部を設立して学生を受け入れ、卒業生を最終的に教官にまで育成するという当時でも12年半にわたる息の長い協力でした。人づくり、特にアフリカでの人づくりには気が遠くなるような長い時間がかかりますが、長く続けられればそれなりの成果が出るということをこのプロジェクトは証明しました。

ODA予算が削減傾向にある一方で、対応すべき課題や国・地域はますます多様化しつつあり、近年JICAではプロジェクトが小型化・短期化する傾向にあります。また、業務実施契約型の案件も増えて、息の長いプロジェクトに取り組むのが難しくなっています。例えば、コンサルタントが専門家で赴任した場合、その仕事の評価が次の仕事にも繋がるため、目に見える成果を出そうと、つい自分で仕事をしてしまいがちです。カウンターパートがその気になるのを忍耐強く待つ余裕がなかなか持てないのかもしれない。特にアフリカでは、そういうやり方はあまりよくないような気がします。

今アフリカのお米の仕事を担当しているので、ウガンダでネリカ米を普及させようとしている坪井達史さんという専門家がいます。協



牛のディッピング（薬浴）の様子

力隊員から専門家となつて、トータル30年近くアフリカを中心に活動している方で、カウンターパートとの付き合い方は絶妙です。

待つべきところは待つ。

アフリカの人づくりにはそういう息の長い協力が必要だと私は思っています。JICAの技術協力の良さは、相手が育つのを傍らにいて待つところにあるのかもしれませんが。

当時ザンビア側や北海道大学には、このプロジェクトは未来永劫に続くという認識があったように思います。このプロジェクトは関係者の数がとても多く、皆がそれぞれに思い入れを持っていたので、プロジェクトが終わることに對する風当たりは相当強いものでした。ザンビア側、日本側双方の関係者を納得させるには多大な労力を必要としましたが、多田リーダーの活躍もあつて最終的にはいい形でプロジェクトを終えることができました。

もし、あのタイミングでプロジェクトを終了させていなかったら、ザンビア側の日本への依存心が強くなつてしまつていたかもしれません。正直言つて、あの当時は本当に日本の協力がなしで自立できるのか心配していたのですが、試薬を節約し、機材も直したりしながら、継続して獣医師を輩出し、様々な分野で研究も行われているようです。ザンビア人の人材が揃つてきたということだと思います。

愛情ある継続的な日本側の支援

このプロジェクトが結果としてうまく行ったのは、日本側の支援者が継続して関与していたことが大きいと思います。

功労者の1人は、国内支援委員長で現在北海道獣医師会会長の金川弘司さんです。金川さんは高名な獣医師であり、ベストセラーとなったコミックの『動物のお医者さん』にもモデルとして登場しています。ザンビアを愛する彼は北海道大学獣医学部とザンビア大学獣医学部とを強く結びつけていました。

金川さんは案件の初めからずっと関わっていて、その教え子だった多田さんがバトンを繋いだという構図でした。長期にわたって愛情を持って見続けるということは、つくづくすごいことだと思います。

橋本久典さんという専門家は腕のいい臨床獣医師だったのですが、このプロジェクトのフェーズ2に参加してから国際協力の道に入り、バン格拉デシユなどを経て個別専門家として再びザンビアに戻りました。けれども現地で病に倒れ、志なかばでお亡くなりになりました。ザンビア大学獣医学部の長い歴史は、支えてくれた本当に多くの関係者の情熱によって成り立ってきたものだと思います。

JICA専門家にとって不可欠な資質——技術力。
さらに、一緒に解決しようという姿勢。

集団の中でコミュニケーションをとるスキルは日本でも途上国でも同じです。性急な成果が求められる流れの中で、報告書の体裁を整えるのみならず、実際の仕事の場で先方とどう付き合っていくのか、向こうの人のことをどう考えるのかということを変更して考えてみる必要があります。

私は、JICAの仕事をしていて、途上国の人と心が通っていると感じることはありません。現地で連日のように協議を続けていると、双方の主張が対立し、にっちもさっちもいかなくなる場合があります。さてどうしたものかと思っていると、先方の担当者がこちらの立場をサポートするような発言をしたり、議論の落としどころで目配せをしてくれたりすることがあります。お互いに理解していることを感じる瞬間です。価値観の相違や多少の方向性の違いはあっても、この感覚が大切なのではないでしょうか。

技術協力の現場において、技術の重要性は厳然と存在しています。一時期、技術を偏重しすぎて結果が出ないと言われたことがありました。例えば高度な技術で灌漑施設をつくって

も、その後に水利組合がきちんと維持管理をしていかなければ施設は使いきれません。他方で、最近言われているのは、最初に本当に使いやすいものをつくっておけば多少組織が弱くてもうまく行くのではないかとことです。実際にそういう事例もあります。

JICAもハードとソフトの間で常に大きく揺れています。その中間くらいに真実があるのだと思います。このバランスがとても難しいのですが、あるJICAの大先輩はハードとソフトのベスト・ミックスが重要だとよく言います。私もそんなふうを考えています。

ただ、それ以上に重要なのは、やはりわれわれ自身の姿勢、先方に対する姿勢だと思いません。一緒に解決しよう、一緒に何とかしようという気持ちです。人にも格があつて、どれだけ肩書きが素晴らしくとも、言っていることがどんなに立派だとしても、本心でその国のことを考えていないと、どこかでばれてしまうものだと思います。こういうものはそれまでの経験の積み重ねであり、急に取り繕おうとしてできるものではありません。現地で慕われている人は、例えば朝早く1人で田んぼを見に行っているとか、技術力もさることながら、こうした姿勢が相手側にも伝わっているのだと思います。

人の心に一番訴えるのは、1人ひとりの人間ドラマだと思いません。人生のかなりの部分をザンビア大学獣医学部に費やした人たちの物語も、きつと後に続く人々に何らかのメッセージを与えてくれるのではないでしょう。か。・・・」



かどひら むつよ
門平 睦代 氏

担当分野：疫学（フェーズ2）

1955年埼玉県生まれ。帯広畜産大学准教授。岩手大学農学部獣医学科卒業後、埼玉県庁大宮保健所・食品衛生課勤務、青年海外協力隊（ザンビア国ンドラ市コッパーベルト州獣医局獣医師）、カリフォルニア大学デイビス校（予防獣医学修士）、FAO専門家（汎アフリカ牛疫撲滅作戦・獣医疫学）、カナダ・ゲルフ大学・オンタリオ獣医学部（獣医疫学博士）を経て、1995年4月より1997年7月までザンビア大学獣医教育プロジェクトの専門家（獣医疫学）として活動。

「お金をかけずにできることはたくさんある」と
相手が理解できたときには、もう私の役目は終わ
っていたという感じですよ。お金がなくなるとも、気持
ちを変えれば何かが出来ることを、私はアフリカ
で実感しました。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」——門平睦代氏にこのユネスコ憲章の前文を覚えてくれたのは、帯広畜産大学名誉教授の田島重雄先生だったそう。今、田島重雄先生と同じ帯広畜産大学で教鞭をとっている門平睦代氏は、どのような体験を経て「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」に携わるようになったのだろうか。

1978年に岩手大学農学部獣医学科を卒業後、青年海外協力隊員として、ザンビアで活動した門平氏。その後、1987年から1990年まではFAO（国連食糧農業機関）の職

員をしていた時期もある。

ザンビアでの専門家活動から戻った後は、1999年から2005年まで名古屋大学助教を務め、2005年から帯広畜産大学畜産学部准教授として、獣疫学、家畜熱帯病学、参加型畜産開発の講義をしている門平睦代氏のザンビア大学での挑戦を紹介してみたい。

アフリカへの夢をザンビアの獣医師隊員として実現

「・・・私は1981年の4月から2年間、青年海外協力隊（JOCV）の獣医師隊員としてザンビアのンドラに派遣されました。昭和55年（1980年）の4次隊です。当時は5、6人しかザンビア人の獣医師がいなかったのですが、日本人の獣医師隊員が2年ずつ交代で入っていました。まだ誰もザンビアのことを知らなかったような時代です。東京オリンピックにザンビアも参加していて、入場行進するときには白人が旗を持ち、閉会式ときには黒人が旗を持っていました。ザンビアは東京オリンピック開催中の1964年10月24日に独立したのです。最初に旗を持っていた白人の柔道家はザンビアで酪農をやっている、その後その方を訪問する機会もありました。」

協力隊員になる前は、埼玉県庁の公衆衛生分野の獣医として2年8か月勤めました。当時はまだ協力隊の現職参加制度がなかったので、辞めて協力隊員になったのです。親も私が子どもの頃から何か言い出せばやってしまうのを知っていたので、1回行けば気が済むだろうくらいに思っていたのでしょう。仕事を辞めてまで行くことに賛成をした訳ではないと思いますが、私は子どもの頃からとにかくアフリカに行きたくて仕方がありませんでした。

以前テレビで『野生の王国』という番組をやっていて、私はその番組がとても好きでした。あるときその番組で象を治療している人を見て、とても強い衝撃を受けました。自分が野生動物の獣医になろうという気持ちはなかったのですが、とにかくアフリカに行ってみようと思っていました。文化人類学的なものにも興味があったのだと思います。でももちろんアフリカに知り合いはいないし、一番安全で確実な方法は協力隊なのかと考えました。大学の先輩で女性第1号の獣医師としてザンビアに行っている人がいたので、私も行けるかも知れないと思ったのです。

実際にザンビアに行ってみて、これなら暮らせると思いました。当時良かったのは、日本人をばつんと1人で派遣するのではなく、必ずザンビア人の上司のいる所、つまり州の中心のところに派遣させてくれたことです。必ず上司がいるので、ザンビアのことを聞きながら自分のできることをやれました。

私の配属先には前任者がいて、私は2代目でした。小動物をやってくれということでは基本的には犬と猫を診たのですが、近くの動物園の動物や、家畜の山羊や牛など、何でも診ていました。ある意味では協力隊員らしからぬ活動だったのかも知れませんが、それがザンビアからの要請でした。ザンビア政府の官報にも名前が載って、獣医師として全国に紹介してもらいました。また、住居もちゃんと用意してもらって、それなりの権限も与えて頂きました。

当時、ザンビアの獣医局自体がまだまだこれからで、人手も十分ではなかったし、外国人は2〜3年で帰ってしまうため、ぜひ大学をつくって欲しい、人材育成をする場所をつくって欲しいという要請が日本に上がったのだと思います。



現地の搾乳風景

当時はザンビアに協力隊員の獣医師が5人いたので、私たちは半年に一度みんなが集まって何かできないかと話し合っていました。調査や勉強会をしたり、特定の地域を見に行ったりもしました。そういうことが後のチーム派遣にも繋がっていったのだと思います。

私は、毎日診療に来る動物を1人で治しているだけでは意味がない、何かザンビアのためになることができないかということを考えていました。私の帰国後にザンビア大学獣医学部のプロジェクトが始まり、そこにも協力隊員が5〜6人派遣されると、フィールドの隊員と大学の隊員とが協力をして、フィールドでサンプルを採ったら大学で研究をするという仕組みができていったとのことでした。

やることをやっていたら日本人の獣医師は政府に意見を出しても比較的聞いてもらえませんでした。アフリカでは、女性であってもきちんとして仕事をさせてもらえたという印象があります。農家の人たちからも、女だからということで軽く見られたことは全くありませんでした。後にFAOで働いていたときも、獣医師だと言うとどこでもちゃんと話を聞いてくれました。そこがアフリカの良さだと思います。

結局、協力隊で2年、プロジェクトで2年、さらに個別派遣の専門家として2年、合計6年間もザンビアにいたことになりました。今では、ザンビアは私にとっての第2の故郷という感じです。協力隊の後、まさかザンビアにもう一度戻るとは思っていなかったのですが、よ

ほど縁があつたのだと思います。

協力隊でザンビアに行く前は、お豆腐屋さんへの講習会などの公衆衛生をやっていたので、人と話す機会がたくさんありました。大学を卒業してすぐに働いたので、日本の社会も体験していました。それで帰国したときも日本社会にすんなり戻ることができたのだと思います。だから今、若い人たちにはすぐにアフリカに出ないで日本で少し仕事をしてから出た方がいいとアドバイスをしています。日本の国内状況がどうなのかを知っていると知らないのでは全く違います。途上国の人々は日本の状況を知りたがるので、日本の現状を言えないとバランスが悪いのです。さらにはコネクションというか、何かがあつたときに問い合わせができる場所があるのもとても心強いことです。

「疫学」と出会い、先が見えない中でもキャリアアップしていく

協力隊から帰国後、東京の大学の研究室に通っていたときに、ザンビア大学に獣医学部ができることを初めて知りました。ちょうどその頃、アメリカに行つて勉強してみたいと思つていたので、アメリカの4つくらいの大学に手紙を書きました。アフリカで2年間こんな仕

事をしてきて、またアフリカで働きたいのですが、どんな勉強をすればいいのですかというとても曖昧な手紙だったと思います。

ところが、すぐに返事をくれたのがカリフォルニア大学デイビス校で、「疫学^{えきがく}」を勉強したらいいよと教えてくれたのです。当時は疫学の「え」の字も知らなかったのですが、最初に返事をくれたので、とにかく行ってしまおうと私はカリフォルニア大学に留学しました。1年でマスター（修士号）を取り、疫学がとても面白いことを知りました。

それまでは疫学のことを全く知りませんでした。基本的にザンビアではクリニックに連れてこられた動物の診療をしていました。狂犬病の予防接種もたくさん実施しました。最後の方になって少し余裕が出てきて、実際に農家を訪問するなど、野外活動も始めていきました。実際にフィールドに出てみて、野外活動はとても面白いと思いました。農家の人たちと話をするのが面白かったです。そしてそのようなことを書いてカリフォルニア大学に手紙を送ったのが疫学と出会うきっかけでした。

協力隊時代にタンザニアのザンジバルに行ったとき、国連のWHO（世界保健機関）に勤める日本人の専門家に偶然会ったことがあり、次は国連の職員としてアフリカに行けたらいいなと思っていました。そこでカリフォルニア大学に行く前に、外務省の将来正規の国際公務員として働くことを目指す制度の一つ、アソシエイト・エキスパート（Associate Expert）

というプログラムの試験を受けて登録しておきました。その後、カリフォルニア大学でマスターを取ったと連絡をしたら、ちょうどいいプロジェクトがあるのでケニアに行って下さいと言われて、FAOの職員として3年半ほど勤めることになったのです。

FAOでの任務は牛疫撲滅作戦というもので、アフリカ大陸から牛の病気を撲滅させるプログラムでした。34か国が対象だったので、ナイロビを基地としてアフリカの25か国くらいを回りました。ザンビアにはその病気がなかったため、休暇を取って一度遊びに行っただけでした。その頃、ザンビアではこのプロジェクトのフェーズ1が始まっていました。

予定の任期が過ぎた後もFAOでずっと働くこともできたのですが、3〜4年働いているとマスターだけでは専門性が足りないと思うようになってきました。そこで今度はカナダのゲルフ大学の博士課程に入学しました。そして、ケニアを現場に調査をして論文をまとめ、1994年の秋に卒業しました。カナダで博士号を取ったものの日本で教えるところがなく、どうしようかと思っていたときに、ではザンビア大学に來ればいと北海道大学の方から声をかけられました。それまで北海道大学とはあまり関係がなかったのですが、学会等で北海道大学の先生と話をしている、日本で職がないのならザンビアでフィールドをやって下さいと言われたのです。カナダから12月に帰国して正月は日本で過ごし、1995年の4月にザンビアへ赴任しました。

こうして語ると、どんどんキャリアアップしていったように聞こえるかも知れませんが、実際は先がどうなるかわからない日々でした。必ずしも博士課程を修了できるとは限りませんが、最初は奨学金もありませんでした。カナダに行つてから、1年目の成績で3年間の奨学金をもらうことができたので、留学は賭けのような部分もありました。なぜカナダに行つたのかというと、私の指導教官はアフリカでの経験もあるし、いいのではないかとFAOの同僚のみんなが推薦してくれたからです。その指導教官は、今は国際機関のリサーチ部門の長になってナイロビにいます。今でもケニアと一緒に仕事をすることがあります。

カナダでも疫学の研究を続けました。部屋の中で実験をするラボ研究とは異なり、フィールドで病気の伝播原因を見つけ出して予防戦略を立てることが疫学の目的です。ある意味では、政府の戦略を立てるための一手法とも言えます。こんな風にすればマラリアがコントロールできますよと国連などに指摘したりするのです。またその戦略を立てるためにフィールドに出てサンプルを採ったり住民に質問をしたりもします。例えば、蚊帳かやを使うところと使わないところではマラリアの発生率が違うと出れば、蚊帳かやを使った方がいいということを実証していきます。また、疫学とは予防獣医学の分野の学問でもあります。

私たちは基本的に外へ出て農家を訪問し、牛の飼育方法を尋ねて、採血をします。こうして病気の発生と飼養管理方法がどのように関連しているのかのリスク要因を見つけ、それを

排除することによって予防していきます。調査研究だけであれば、必ずしも獣医師である必要はありません。診察をするときにはもちろん医師免許が必要となるのですが、調査には経験があればいいのです。しかし獣医師であれば対策を立ててそれをすぐ実践することができません。

専門家として再びザンビアへ、フィールド調査開始

私がプロジェクトの専門家として入ったときは、フェーズ2で長くリーダー不在が続いた後の体制建て直しの時期でした。大人数のプロジェクトだというのが最初の印象でした。専門はみんなそれぞれ違っていたので、他の専門家と一緒に仕事をすることとはなく、プロジェクトのチームに入ることに関しては全く問題がありませんでした。

リーダーと専門家が話し合いをして方針を決めていったので、揉めることは全くありませんでした。むしろ問題だったのはカウンターパートのことでした。カウンターパートは、アメリカで博士号を取った人で、FAOのときからの知り合いでした。私より年上だったので、**「カウンターパート」**という英語が弟子のような響きがあるということで、その言葉



疾病予防学講座(Disease Control)のスタッフらと（左端より2人目が門平専門家）

は使って欲しくないと言われました。私は、日本人と現地の人の1対1ではなく、職場のみなが協力して仕事をすべきだと思っているので、人を指す「カウンターパート」という言葉ではなく、「カウンターパート機関」のように専門家が関係する部署として広い意味で使う方がいいのではないかと思っています。JICAに出す書類には彼の名前をカウンターパートとして使いましたが、特にどちらが上下という関係ではなく共同研究者という形をとりました。

プロジェクトが始まって10年が経った1995年くらいから、第1期生の何人かが博士号を取って戻ってき始めて、1999年頃になると、ほとんどみんなが戻ってきました。そこからさらに10年を経た現在ですべてのポストがザンビア人になっています。私が赴任した頃には、

ザンビアの人たちは「ザンビアナイゼーション」を当たり前のこととして受け入れていたと思います。

多田さん（多田融右チームリーダー）は私がケニアで野外調査をしていたことをご存知だったので、あなたはまずとにかく外へ行きなさいと言われました。このプロジェクトはもう終わるけれど、次の技術協力プロジェクトをするにしても、どこをフィールドにしたらいいかを2年かけて調査したらいいと言って下さったのです。私たちはそのために適当な場所、畜産開発のポテンシャルの高い地域を見つけるのがいいのではないかとこのことを話し合いました。

初めは卒業生が現場でどのように活躍しているのかを調査するために、全国に散らばったザンビア大学卒業生の職場を訪問していききました。卒業生は最終的にプロジェクトが終わった段階で150人くらいでしたが、当時でも130人くらいはいたと思います。写真を撮り、インタビューをしていきました。

FAOにいたときに色々な国を見て回りましたが、アフリカでは、朝から椅子に座って新聞を読んで、時間になると家に帰るような外に出ない獣医（師）が大勢います。獣医師が非常に少ないということもありますし、社会的な地位が高いということも理由だと思っています。卒業生たちがこんな状態でなければいいなと思っていました。

ザンビア大学獣医学部の卒業生たちはまだ若い人たちだったので、車がないとか設備がないとかそれぞれ色々な問題を抱えていましたが、呼ばれたら極力外に出て仕事をする姿勢が見受けられました。ただ、基本的な設備が十分でないことは明らかでしたし、もしこの人たちがこのまま数年放っておかれてしまったらきつとやる気をなくして現場に出ない普通の獣医になってしまわないかという危惧もありました。それが先日まで行われていたフェーズ3とも言える再教育のプロジェクトである「家畜衛生・生産技術普及向上計画プロジェクト」に繋がっています。

卒業生は全国各地にいましたが、首都から離れば離れるほど活動がどうしても停滞してしまいがちでした。政府に卒業生の活動状況を聞いてみると、以前と比べてレポートがきちんと出てくるようになったと言っていました。今はかなり隅々のところまで獣医師が配属されているので、さまざまな病気の発生状況がわかるようになってきたようです。色々と調べていくうちに畜産が重要な地区は南部州だということがわかってきたので、そこを中心に調査を始めました。重要な地区というのは、一番牛を売って収入を上げている所です。ザンビアには72もの部族がいると言われていますが、部族によっても牛が重要な人たちとそうでない人たちがいます。

私は全国を回って獣医さんたちと話をし、統計を集め、調査を進めていきました。調査を

してみると、政府の要職である獣医局長になる前に務めるポストがあることがわかりました。南部州モンゼ県の獣医（行政）官のポストです。必ずそこに優秀な人間が配置されています。色々調べたところ、モンゼ県は一番牛が売られているところで、そこを拠点に牛がコッパベルトとルサカに流れていました。コッパベルトには銅山があるのでお金を持っている人がいますし、ルサカは首都です。それで一番賢い有能な人間がモンゼ県へ行かせられるのです。モンゼの県獣医官を務めた人がやがて国の獣医局長になります。

ザンビアはまだあまりシステムができていないと思っていたのですが、きちんと押さえるところは押さえているのだなと思いました。そういうことは色々な国を回って知っているつもりだったので、ザンビアにはザンビアなりの戦略があるのだということを改めて知りました。モンゼ県には小さなラボがあったのですが、もう少し活性化させようと、農民たちと一緒に仕事を始めていきました。実際にやったのは個別専門家になってからですが、連携はプロジェクト専門家の頃から始めていました。

プロジェクトを終了させ、独り個別専門家として残り、自立を支援

フェーズ2は大学院の立ち上げが大きな課題でしたが、フェーズ2の後半になると、フェーズ1で育った学生が日本などへ留学して、ようやくザンビアに戻り始めていた時期でした。大学院を始めても、最初は奨学金がうまく取れずに学生が入ってこなかったのですが、その後ノルウェーから奨学金が出るようになって、学生たちが入ってきました。

プロジェクトの最後には私も実際に教壇に立ちました。私がやったのは科学的方法論といって、人の前で発表することや統計処理方法、プレゼンテーションのやり方や論文の書き方といった科学的な研究をするための基礎的な訓練でした。疫学の授業は分担でやりました。既に人がいたので無理にやる必要はなかったのですが、頼まれたことはやればいいじゃないかとリーダーが言って下さいました。

この頃エイズで教官やテクニシャンが随分亡くなりました。若手が育ったと思っていたのですが、エイズの影響が随分あったことも否めません。親しかった人たちも亡くなっていききました。中には日本で亡くなった人もいました。留学がもうすぐ終わる頃に急に倒れたのです。結核の症状が出ていたのですが、検査をしたらエイズでした。キリスト教徒だったので日本で火葬する訳にもいかず、受け入れ側は困っていました。最終的には、ザンビア大学が

全部お金を払って、遺体を洗浄し、ザンビアまで空輸しました。

多田さんは、リーダーとしてプロジェクトの終わらせ方に相当苦心していたと思います。逆に北海道大学の先生たちはもつとプロジェクトを続けるべきだと思っていたはずです。プロジェクトのフェーズ2が終わっても、科学研究費をとって定期的に来る先生もいましたが、個別専門家として残った私はそういった先生たちも受け入れて、ザンビア大学と北海道大学のリンクがなくならないようにしていきました。やはり私がいることで便利だったと思います。

北海道大学にはザンビア大学の学生が2、3人行っていたので、大学としてもこの繋がりをうまく利用したいという気持ちがあったのだと思います。私の帰国後は、北海道大学からちよ



最近の首都ルサカの様子

うど引退されたばかりの先生がまた個別専門家としてザンビアに行ったと記憶しています。

このように、プロジェクト終了後、私はザンビア大学獣医学部に個別専門家として再び戻り、1997年の9月頃から1999年の5月頃まで活動しました。

次のプロジェクトを始めるために、ザンビア大学の教官らとプロジェクトの提案書を書いて色々なところに出していききました。それまで私は2年間現地の人たちと付き合っていたので、はっきりものを言う人間だということが周知されていました（笑）。私がNOと言えば絶対にNOだということはザンビア大学の教官らにも知れ渡っていたと思います。

JICA事務所の方からもサポートしてもらいましたが、「頑張って自分たちでちゃんとした計画書をつくらない限り、お金は入ってこないんだよ」と私はカウンターパートの教官らにいつも言っていました。彼らもこれからのように運営していけばこの大学を維持していけるのかを考えて、彼らなりに実践していました。こうした意識は以前から芽生えていたとは思いますが、色々な自助努力も見受けられました。プロジェクト終了後、日本人は私1人になったので、それまではリーダーと調整員しか出ていなかった学部内の会議にも参加させてもらえるようになり、運営上の問題点も聞けるようになりました。



卒業式レセプションにて（左側から2人目が門平専門家）

何らかの支援を続け、日本との関係を維持する

多田さんとはそれぞれの任期終了後もタンザニアやザンビアで会っていました。私は文部科学省の科学研究費で行き、JICAの国際協力専門員である多田さんは新規のプロジェクトの立ち上げでザンビアなどに行っていました。私の研究はマラウイ・タンザニア・ザンビアの3か国が対象で、お互いの国が補い合って大学の教育レベルを上げていけるように、ザンビアで広域のプロジェクトができないかということでしたので、多田さんともよく話をしました。その後、ザンビアではフェーズ3に相当するJICAの新しいプロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画プロジェクト」が立ち上がって、

マラウイに関しては、帯広のJICA国際センターで「小規模畜産経営者の技術向上」という研修事業が行われています。

今は北海道大学がアフリカの拠点としてザンビア大学の施設を十分に使っています。ある意味では理想的な技術協力プロジェクトだったのだと思います。普通はプロジェクト期間が終われば縁が切れてしまいますが、北海道大学は現在でも文部科学省のODA予算で人を常駐させ、責任を持ってやっています。

今は日本の大学が海外に拠点校をつくるのが流行で、北海道大学はこれまでの人脈を使ってザンビア大学から学部生や院生を受け入れたりしながら、彼らがザンビアに戻ってから設備をしっかりと使ってもらっているのでしょうか。

他方、留学から戻った人たちが日本から来る学生を指導しながら、お互いにギブアンドテイク (Give & Take) でもやっています。同様に、私も友人たちと協力してケニアに研究所をつくりました。今度そこへ学生と一緒に行くことになっています。

先日、ザンビア大学獣医学部に北海道大学が研究のために新しい施設をつくったので、学部で獣医を育てるだけでなく、もっと重要な研究の拠点になる可能性も出てきています。ザンビアは政治的に安定しているというところが強みなのだと思います。ジンバブエは良い大学をつくったものの、政治的に不安定なのが問題です。日本には第三国に留学させるスキー

ムがありませんが、もし第三国長期研修制度みたいなものができれば、また違うアプローチができるのかも知れません。日本へ1人呼ぶ予算で、10人くらいをザンビアで育てることができます。

他方、最近では周辺国からザンビア大学に留学に来る人たちも増えていきます。今はマラウイからも2名が留学しています。奨学金があればザンビア大学に行きたいという潜在的なニーズは周辺国に随分あります。マラウイ政府がまさにそうで、マラウイには今も5、6人しかマラウイ人の獣医師がいません。ちょうど20年前のザンビアと同じです。

1985年にプロジェクトが開始されてから最近まで、ザンビア大学獣医学部へはほとんど途切れずに何らかの日本による支援がずっと続いてきました。細々とした関係のときもありましたが、日本との関係はずっと続いてきました。日本へ留学生が来ているとか、私たちが現場に行って調査をしているなどの繋がりも含めてですが。私自身も名古屋大学に所属していた頃、科学研究費を使って再びザンビアに行つて研究活動をしていました。

プロジェクトの最初の頃から知っている人が再びザンビアを訪問すると、建物や設備がよく維持されているし頑張っているなという印象を強く受けると思います。当時は随分お金を使ったということで批判があったかも知れませんが、今でも施設は上手に使われています。教育というのは成果を見るまでにすごく時間がかかるものですが、1981年からずっとザ

ンビアを見てきていると、やはりこれはやって良かったプロジェクトだと思います。最近では帯広畜産大学に移った2005年の1月にザンビアへ行きました。新しいプロジェクトが立ち上がった頃です。

2008年6月くらいに、北海道大学が中心となってザンビア大学フェアをやったこともありました。スタートのときからの写真を集めているということで、写真はないかという問い合わせがありました。首都のルサカで実施し、ザンビアの人たちにもアピールしたようです。

畜産業へのインパクトを目指し、野外研究を続ける

ザンビアの畜産業に対するプロジェクトのインパクトはまだまだこれからだと思います。大学の中で研究活動をするにはそれなりに道筋が出来ているのですが、野外での研究にはまだ足りないと思います。私は個別専門家として派遣されたときに南部州モンゼ県のある村の農民たちと、大使館の草の根無償資金協力（草の根無償）を活用して「家畜衛生プロジェクト」を始めたのですが、そこまでする人はなかなか出ていません。ザンビアの先生方もあま

り野外には行きたがらないようです。カウンターパートだったサムイ (K. I. Samui) 先生やその後学部長になった女性も連れて行ったのですが、誰かが連れて行かない限りは自分では行こうとしませんでした。なんでそんな田舎に行つて未開発の地で仕事をしなければいけないのだという発想でした。

大学院はないよりはあつた方がいいのでしようけれど、本当の意味で畜産業にどこまで貢献できるかというとまだまだだと思えます。それで新しいプロジェクトでは「普及」を柱に置いたのだと思います。

みんなは行きたがりませんが、現場はとても面白いのです。草の根無償が取れたときに、農家の人たちにテレビに出てもらつたり、ルサカに来てもらつたり、大学の先生に会つてもらつたりと、色々とリンクをさせる努力はしてみたのですが、この活動は継続しませんでした。農家が自分たちでできるようになったので、大学のお世話になる必要がなくなつたということもあるのですが、どちらかと言えば、リンクがないところの人のの方が一生懸命やる傾向がありました。その後この地域は国際 NGO と協力してそれなりに発展していきました。

日本の先生が野外で血液が必要なときには、その農家に協力してもらえような体制もつくりました。首都から 250 キロメートルくらい離れている所なのですが、そこが一番畜産のポテンシャルがある地域だったので、そこから病気のコントロールをしていかなければ

ならないだろうと思ったのです。

最初にどういう状況で暮らしているのかを調査したとき、125軒を対象に調査したので3か月くらいかかったのですが、牛が一頭でもいる農家と牛が全然いない農家では生活レベルが大きく違いました。まだ物々交換なのか、現金収入で生活しているのか、どのくらい牛を売ることができるのかも調べました。

牛を持っているだけではなかなかお金は動きませんが、モンゼ県の人たちは大規模な商業農家くらいに売っていました。売ることを知っている人たちなら、牛をうまく増やせばお金が動き始めます。貧しくても牛を持っていれば他の農家よりずっと豊かで、人を雇って農業を手伝ってもらっていました。

誰かがリーダーシップを取ることで、その周



歴代の学部長の女性2人と（左端がラブレスさん、その隣がムワセさん、右端が門平専門家）

りの人たちの生活も向上させることができます。

だからモンゼ県の獣医官には一番優秀な獣医師が配置されているのです。

私は最初の頃から畜産業へのインパクトを意識してフィールドに出ている訳ではありません。初めは普通の獣医だったので、農家に行つてサンプルを頂いたり血液を取ったり、色々と質問をして帰つてしまっただけでした。ザンビア時代よりも前の話なのですが、あるとき農家に行つたら「あなたたちは二度と帰つてこないじゃないか」と言われたことがあります。私たちはサンプルを採つて分析して論文を書いてしまえばそれで終わり。普及のことは全然考えていませんでした。それでも十分役に立っていると思つていたので。

けれども、ふとサンプルを見たら、この牛は陽性だから今すぐに治療しなければならぬことがわかつたのですが、もう日本やカナダに帰つてきてしまったため、すぐには戻れないという状況も多く、段々ところどころした調査方法を疑問に思うようになりました。すると現場の人の生活がよく見えるようになっていきました。

すっかり「見よう」と思い、「見なければいけない」という風に気持ちが変わつてきたのです。その頃は「参加型手法」などという言葉は知らなかつたのですが、現地の人たちの話を聞かなくてはいけないということを自然に学んでいきました。専門外のことでしたが、お金は何に使っているのか、どんなものを買っているのかなど、家計簿レベルの話も調査の中

に加えようと思いました。日本に帰ってきてから「参加型手法」というものがあるということを知り、改めて勉強しました。

自分が変われば相手も変わる

かつて草の根無償のプロジェクトを一緒にやった本当に貧しい農民が30人でやっているようなNGOがあつたのですが、私はお金を取るところまで一緒にいて、その後日本に帰国してしまったので、どうなったのだろうか、本当にあの人たちだけでできているのだろうかとか気にかかつていました。3年後に、ザンビアで協力隊員だった人がたまたま古屋大学に入ってきて、彼がザンビアに何か月か調査に行くことになったので、ぜひその村に行つて調べてきて下さいと頼みました。するとなんとちゃんとお金が計画通りに使われていて、牛の数が増えていて、色々な効果があつたということを報告してくれました。

嬉しくなつた私は、そこへ行かなければならないと思い、なんとかお金をつくつてそこを再訪しました。信じていることは実現できるのだと実感しました。もし専門家を短期間しかやっていなかつたら、頭ではそんなことを何となくわかつていても、実際に体験することは

できなかったでしょう。長くやっていたおかげでそういう結果までを見させてもらうことができたのです。

ザンビアではまだまだ牛がきちんと飼われているとは言えません。それで随分損をしているので、お金をかけずに改善する方法を当時一緒に勉強していました。ザンビアでは私たちが教えるのではなくて、一緒に観察しながら研究活動をしました。例えば、子牛を産まれたまま放っておくと母親が放牧されるときに一緒にいってしまうので、アフリカの牛は20%くらいが1歳にならないうちに死んでしまいます。それに気づいて、子牛をある期間つないでおくと死ななくなりました。

このように、お金をかけずにできることはあるのだということをお農家の人に気づいてもらうことが私たちの仕事の一つでした。うちはお金がなくてワクチンや薬を買えないから牛が死んでしまったと信じている人がたくさんいます。「この子牛をここに置いたらどうだった？ずっと生きてでしょ」と、一緒に観察をするようにしました。「お金をかけずにできることはたくさんある」ということを相手が理解できたときには、もう私の役目は終わっていったという感じです。

獣医は本業のみならず、他のこともできるのだなと思い、参加型手法をさらに勉強して、日本でもこれは使えると思って、そんなことを獣医学会で発表したら、賛同してくれる人が

出てきました。その結果「全国畜産支援研究会（愛称・農場どないすんねん研究会）」が立ち上がりました。今は350名がメーリングリストに入っています。日本の農家も変えらる。私たちはそう信じています。全くお金がない農家でも何かができる、気持ちを変えれば何かができるということを、私はアフリカで実感しました。

今では農業経営でもこのような手法を使っています。お金をかけずに牛の乳房炎が良くなったとか、ミーティングをすることによって農民たちのやる気が出て積極的に動くようになったというような事例も出てきました。ザンビアでの経験から人々の暮らしが見えてきました。まさに「変わるの是我们たち」なのです。この言葉はロバート・チエンバースという人が『参加型開発と国際協力』という本で使っています。マニュアルはない方がいい、それぞれの流儀でやっていけばいいと彼は言っています。

自分が変わったなら相手も変わったという経験はとても印象深いものでした。学生に話すにしても説得力があると思います。私はザンビア大学に行くことができ良かったと思っています。今、食品安全委員会やっているリスク分析でもこの手法を使っています。リスク分析では開発の方から入って学んだ社会的な分野の知識・経験を使っています。無駄足は踏んでいなかったのだと思います。

JICA 専門家にとって不可欠な資質——人の話を聞き、異文化を理解し、相手を理解するという総合的なコミュニケーション能力。

言葉でのコミュニケーションもありますし、人の話を聞くというコミュニケーションもあります。さらには異文化を理解するという意味でのコミュニケーションもあります。相手を理解する力、総合的なコミュニケーション能力が専門家としては一番重要なのではないのでしょうか。何かを教えてあげよう・伝えようと一方的に言っているだけでは、どうしても壁にぶつかってしまいます。まず、相手側がどういう状況なのか、心を開いて状況を把握することが肝心なのではないでしょうか。

今注目しているのは「人間関係トレーニング」みたいなものです。環境が良くて、そういう力を自然に備えている方もいるかも知れませんが、専門家は語学研修よりも「人間関係トレーニング」みたいなものを赴任前に受けることがとても大切なのではないかと思っています。人の話をよく聞く、第一印象だけで決めないといったことです。もし一つだけ赴任前の研修として選べといわれたら、「人間関係トレーニング」を1週間くらいじっくりやるのもいいのではないかと思います。

私は今でもザンビアに行くたびに驚きがあります。ザンビア人にはそんなことはできないと思っていたのに、やらせてみたらできたことがあります。できるはずがないと先入観で決めてしまうことがいけないのですね。大学で学生の教育をしていると、ついがんがん言いたくなってしまうですが（笑）、やはり聞いてあげなくてはいけないと思います。実践するのはとても難しいことなのですが（笑）。

アフリカでも現地の人と喧嘩をすることがあります。その次の日に会うと、日本人はわりと前日喧嘩したことを覚えているのですが、アフリカの人には「おはよう」と言ってもやって来る。それを見て、これはとてもすごいことだと思いました。私はアフリカで「喧嘩しても次の日にちゃんと挨拶をすればいい」ということを学びました。日本では喧嘩したら何となくお互い目を合わせず避けようとするのですが、アフリカに行くと最初に驚いたのはそういうことでした。日本は島国だし、うまくやるためにあまりあからさまに言っただけいけないという感じがあるのですが、伝えるべきことはちゃんと伝えて、次の日には友だちに戻るということが、コミュニケーション能力だと言えるでしょう。

私の場合には獣医でしたが、技術面での専門性を軸にして、一緒に問題を考え解決することが技術協力なのだと思います。現場の問題を一緒に分析して解決していくこと。とにかく現場を見るというのが大切だと思います。現場で何が起きているのかを自分で把握してか



牛の放牧風景

ら物事を考えていく。私たちの疫学の分野だと、まず現場を調査してからすべてが始まります。現場を見て動くことを徹底的に教えられるのです。疫学は社会学とオーバーラップしているので、まず現状の分析をしなければ始まりません。どんな人がそこにいるのかというように、問題分析には「人」も含みます。

畜産技術にしても、それぞれに最適な家畜品種や技術があります。例えばホルスタインのよくな日本の牛をアフリカで育ててもホルスタインの能力は十分に活かせないのです。まず現場に行つてどういう人たちがそこにいるのかを理解することが技術協力の第一歩だと言えるでしょう。

こうした点からも、専門家にはコミュニケーション能力が重要なのだと思います。ここで通

用したから違う国でも同じようにいくとは限りません。大学で熱帯地域の畜産学の講義をしています。その地域の人たちの状況にあった家畜を導入することが一番良いと言っています。病気に弱い牛を診断施設がなく診断技術も低い場所には連れて行けません。なるべく病気に強い牛を導入した方がいいのです。こういうことは様々な技術移転にも当てはまるのではないのでしょうか。そこに住んでいる人たちが扱えるもの、理解できることを広めることがより重要なのだと思います。

ザンビアに4年間いて、専門家になって本当に良かったなと思いました。ただ、それは4年間同じところにいられたからこそ見ることができたものだと思います。もし転々としていたら、種は蒔くけれど何だかわからないうちにまた次へ行かざるを得ません。4年くらいないとわからないことが色々ありました。アフリカのスピードではそのくらい時間がかかるのです。帰国してから3年経つてようやく結果が見えてきたこともあります。変化を見るには、やはり10年くらい時間が必要なのではないでしょうか。

私は向こうの気持ちが変わるまでひたすら通い続けました。片道250キロメートルの所へ毎週通っていました。「またあいつ来たぞ。また言っているよ」という感じだったと思います。それでもあきらめずに私は通い続けました。私は行くことに意義があると思っていたので、何もしなくて行くだけでいいのです。「元氣？」と言うだけでもいい。しかし行き続

けなくてはいけないと思っていました。3年続けて毎週行けば、大概の人は色々なことをやってくれるものです。これは私なりの地道な戦略でした。

行っただけで一銭もお金は出さなかつたのに、勝手に村が変わっていく。そうしたことが現実に起こるのです。私がやったのは行って話をしただけです。「10年後にこの村はどうなっていて欲しいの」というようなことを毎回話していました。そうするといつしか「じゃあ今何をしようか」と思うようになります。国際協力の現場にいと、「お金、お金」と言われてばかりで、またかと思っていたのですが、通い続ける道のりの中でそうではないことが見えてきました。

確かに途上国の官僚や役人を相手にするとうんざりすることが多いのも事実なのですが、それは本当に貧しい人たちを対象に仕事をしているとわかってくるものです。今ではそのときの経験が日本の研究会に繋がり、日々反省しながらですが、学生の指導にも役立っています。今の学生にもアフリカに行きたいという人がいます。今年の研究室に入ってきた3年生はみんな行きたいと言っているのですが、そうそう連れて行く訳にもいかないので（笑）、大変です。2人くらいにはぜひ行ってもらいたいのですが。

国際協力をめざす人々にまず伝えたいことは、「プロフェッショナルになれー」ということです。「継続は力なり」です。最初は未熟でも、あきらめずにゆっくり同じことを続けて

いると、いつかきつものになります。私自身も、まだまだこれからだと思っています。毎日の精進が、私をよりプロフェッショナルにしてくれると信じて活動しています。そういう意味では、どのような自分になるのかを、私自身、これから楽しみに見守っていきたいと思っています。・・・」



くらた まどか
蔵田 團果 氏

担当分野：畜産衛生／業務調整（フェーズ3）

1962年東京都生まれ。日本大学農獣医学部(現生物資源学部)獣医学科大学院修士課程修了後、栃木県入庁、県畜産試験場家畜保健衛生所勤務。主に黒毛和牛の改良繁殖及び家畜伝染病予防法に基づく疾病検査に携わる。家畜保健衛生所在職中現職参加にて1994年より青年海外協力隊参加。獣医師隊員としてマラウイ国チョロ獣医事務所長として赴任。2000年県を退職し国連ボランティア(スリナム獣医師)としてスリナム大学付属農業研究所と農業省獣医ラボの連携確立及びと畜場の衛生管理技術指導に従事。2003年帰国後、動物病院代診を経て2006年10月～2009年1月までザンビア家畜衛生・生産技術普及向上プロジェクトに業務調整/家畜衛生専門家としてザンビア大学獣医学部と農業省の技術協力体制確立に携わる。

カウンターパートと会話を重ね、彼らの考えていること、自分の思っていること、現場で本当に必要なことを擦り合わせる事がとても重要でした。

日本大学を卒業してから、13年間栃木県の職員をしていた蔵田團果氏は、平成5年（1993年）度3次隊の青年海外協力隊員としてマラウイに派遣されている。その後、県の職員に戻ったものの、国際協力への思いを抑えきれず、職場を辞め、国連ボランティアとして南米のスリナムに赴任することになった。

帰国後、知り合いの病院に勤めていた際、このザンビアのプロジェクトの公募と出会う。獣医の公募は珍しいなど思いつつチャレンジしてみると、現地で亡くなった専門家の後任を急速募集しているところだった。赴任はプロジェクト途中の2006年10月だった。

参加したプロジェクトは、ザンビアで20年程にもわたって行われてきた「ザンビア大学獣医学部技術協力計画」のフェーズ3に相当する「家畜衛生・生産技術普及向上計画プロジェクト」。協力隊員だったマラウイ時代にも噂は聞いたことのある有名なプロジェクトだった。

プロジェクトが終了し、帰国したばかりの蔵田團果氏にザンビアでの思いと挑戦を尋ねたので紹介してみたい。

公務員としての関心から国際協力へ参加

「・・・私が国際協力に携わったのは平成5年（1993年）、青年海外協力隊（JOCV）に参加したのが最初でした。ザンビアの隣のマラウイで、獣医として活動しました。当時はまだ栃木県職員だったので、地方公務員派遣法の枠で参加し、その後県に戻って仕事をしていました。けれども国際協力にもっと関わりたいという気持ちが強くなり、そのときまたまJOCVニュースに国連ボランティアで獣医の募集が出ていたので、私は思いきって退職をしてスリナムという南米の国に行ったのです。

そもそも協力隊員になろうと思ったのは、個人的な興味が強かったのだと思います。今は鳥インフルエンザや口蹄疫（こうていえき）などの家畜の悪性伝染病がずいぶん入ってくるようになってきているのですが、その当時はまだそういう病気が日本に入りにくく私たち獣医ですら見たことがないような病気が日本に入ってきたとき、その判断がつくのだろうかと思っていました。

ちょうど協力隊に参加する直前に台湾で口蹄疫が出たのですが、私はそういう病気が日本で発生する前に見ておきたいと思っていました。写真で見ただけではわからない部分もあるのです。台湾で口蹄疫が出たとき、台湾と海を隔てて500km程の沖縄県はかなり神経質になっていました。日本は島国なので疾病対策をたてやすいのですが、陸続きの国だったら大変なことになっていただろうと思います。そういったときに最前線に立つのは、家畜防疫員である県の職員なのです。そのため、様々な病気について、私たちも勉強していかなければならないと思っていました。

途上国へ行って実際に病気が発生している現状を見ておくことが大切だと思ったこと、さらには日本以外のところから日本の獣医制度や畜産業を見たいと思ったことが、協力隊員に応募したきっかけでした。

ザンビアはマラウイの隣の国なので、今回のこのプロジェクトの先行プロジェクトについては隊員の頃から知っていました。

今度は専門家としてプロジェクトへ

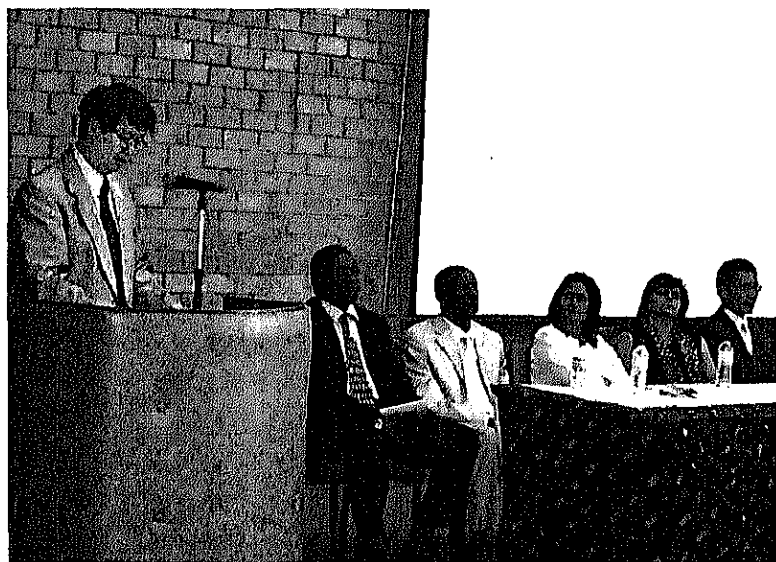
スリナムから帰国後は知り合いの動物病院で働いていたのですが、たまたまJICAの「パートナー」(PARTNER・国際協力キャリア総合情報サイト)のページを見ていたらこのプロジェクトのことが載っていたのです。獣医分野で公募が出ることは少ないので、思いきって応募してみました。このプロジェクトが始まったのが2006年の1月だったので、思いが、前任の橋本久典専門家が1月に赴任して3月に突然お亡くなりになり、急遽後任を探しているところでした。橋本専門家が亡くなられたのが3月で、私の派遣が10月でした。

プロジェクトにはその間専門家不在の空白期間があったにもかかわらず今までのザンビア大学獣医学部とJICAとの良い関係がベースにあつたので、既にカウンターパートの人たちが主体となつてできるところをやっていましたし、現場のニーズアセスメントに関しては、カウンターパートとJICAザンビア事務所でうまくプロジェクト運営されてきました。専門家1年生でしかもプロジェクト途中からの参加となった私にとってはとても入りやすい状況で仕事に臨むことができました。

私が赴任したときには、プロジェクト運営計画は前任の橋本専門家の作成したたたき台を基にもう既にでき上がっていて、彼らは動き出していました。これは、これまでの20年以上

にわたるJICAとザンビア大学獣医学部の協力関係の積み重ねの賜物です。今回のプロジェクトに関しては、私の方が後から入ったので、どこまで進んでいるのかを逆にカウンターパートたちに聞きながら、工程を管理するのが私の仕事でした。ザンビア側のオーナーシップは既に定着していました。幸い私が赴任したときに多田さん（多田融右国際協力専門員）が現地に入っていてくださって、多田さんからも多くのことを聞くことができました。現地では多田さんとカウンターパートたちはかなり助けられました。

ザンビア大学獣医学部に関するプロジェクトは長い歴史があり、最初のプロジェクトからは既に20年以上たっているにもかかわらず、当初の無償資金協力で建てられた建物が



2007年の獣医学部卒業式にて（毎年在ザンビア日本国大使も列席）

とても良く維持されてきました。中に入っている機材もよくメンテナンスがされていて、今でも立派に動いている当時の機材がかなりあります。国立大学とはいえザンビアの予算では、大きな機材の更新はなかなかできないのが実状ですが現在常駐職員を置いている北海道大学を始め、日本国内の獣医大学や先進国の獣医大学等が大学間協力のプロジェクトをやっている、今ではJICA以外からも新しい機材が導入されています。

今の学生数は各学年35人ずつぐらいですが、4年生は40人以上いて、顕微鏡等の実習用機材が足りないくらいです。当初JICAが想定していたのは1クラス30人体制なので、その超過人数分が足りなくなっています。マスターコース（修士課程）は毎年2〜3人が入っている、常に合計で4〜5人は在籍しています。

2007年の段階で、フェーズ1が始まってからの卒業生は284名になります。ザンビアの農業省（正式には農業協同組合省）にいる獣医（師）が200名弱で、そのほとんどがザンビア大学の卒業生で占められる状況になってきました。

現在ザンビア大学には36名の教官がいるのですが、今まではなかなか大学外の現場（畜産農家等）にまでは目がいかず、自分たちで自主的に現場に赴いて病気の検査をすることはほとんどありませんでした。けれども今回のプロジェクトを通じて、現場にも目が行くようになりまし。率先して教官たちが現場に行くようになりザンビアの獣医畜産業に関わってい



2007年の卒業生で獣医学部の卒業生は284名となった

こうと思うようになったということが、今回のプロジェクトの大きな収穫でした。

36人の教官のうち30人がザンビア大学の卒業生で構成され、ザンビア人以外の1人も国籍がインドというだけでずっとザンビアにいる方なので、全員がザンビア人と言ってもいいくらいです。2007年に就任した現学部長はザンビア大学獣医学部第1期の卒業生で「ザンビアナイゼーション」という初めの頃のスローガンは既に達成されていると思います。2人いる副学部長もザンビア大学獣医学部の卒業生です。

卒業生の多くは農業省に入省しザンビア国内で活躍しています。その他の卒業生は外国に出ている人が10名ぐらいいて、他は個人経営の動物病院や白人経営の農場のプライバー

ト獣医になっています。エイズで亡くなった方もずいぶんいます。

卒業生が就職に困るといふことは今のところないようです。ただザンビア政府として獣医をどのくらい募集するのは、その年の政府の予算次第になってしまっています。もう少し増やしていく予定でいるようですが、最終的にどの程度まで増やすのかはわかりません。

今回のフェーズ3に相当するプロジェクトの前に実施された第三国研修の影響もあり周辺諸国からザンビア大学へ留学を希望する学生は増加傾向にあります。現在では南アフリカ、ボツワナ、ナミビア、マラウイの4か国から留学生が来ています。もちろん南アフリカにも獣医学部のある大学はあるのですが、黒人やカラードだとやはり入りにくいようです。ナミビアはかなり国がバックアップして送り出しているようで、毎年複数の留学生が来ています。留学生がコンスタントに来るようになり、ザンビア大学も受け入れ体制が整ってきて、今では地域の大学としての機能もよく果たしていると思います。

当初はEU（欧州連合）がサポートしたジンバブエの大学がそういう地域大学の機能を持つはずだったので、国内情勢の悪化でできなくなってしまうました。それにジンバブエは周辺諸国と異なった教育カリキュラムであったため大学への入学資格等の面で入りづらいついということもあつたと聞いています。

私はフェーズ3に相当するプロジェクトの専門家／業務調整という立場でしたので、大学

で直接講義をすることはありませんでした。学生に対する講義や実習はザンビア人だけで十分にできますし、むしろ私などよりよっぽど優秀で経験も豊富な講師陣です。プロジェクトでフィールドマニュアルをつくることになっていたので、私はその編集作業のアドバイザー的な立場でした。先の第三国研修でも、既にザンビア人がかなり主体的に動いていたようでした。そのときも日本人のコーディネーターは着任されていましたので、計画段階や枠組みの決定は日本人とザンビア人が組んでやっていたのだと思いますが、かなり自主的に動かせるような感じだったのだと思います。

『ザンビアナイゼーション』をベースに2機関の協力プロジェクトを動かす

もはや『ザンビアナイゼーション』は当たり前前に浸透しています。ただ、今回のプロジェクトがうまくいったのも、その『ザンビアナイゼーション』というスローガンがベースにあったからなのだと私は思っています。自分たちでこのプロジェクトを盛り上げていこうという意識が常にザンビア人側にあったのは、JICAや日本の協力のもと自分たちの作り上げてきた学部だから自分たちで担っていこうという強い思いが伝統的に受け継がれていたから

です。彼らは、私が言ったことに對して、どうすべきかを自分たちで考えられるように既になつていました。

フェーズ3のプロジェクトは、農業省とのコラボレーション（協力）だったのですが、実は農業省側を動かすほうが大変でした。今回のプロジェクトの実質的な裨益者は、農業省側スタッフであり、最終的には畜産農家なのですが、当初はそのあたりを全く理解してもらえず、農業省の地方における獣医師補ら向けのトレーニング（研修）を積み重ねていくうちに、農業省の上層部にも実際の状況を掴んでいってもらい、最終的には農業省側も少しずつ積極的に動いてくれるようになりました。

具体的には、農業省から2人、ザンビア大学から2人、ザンビア側コーディネーターと私の6人体制で構成された実施チーム（Implementation Unit）を設け、プロジェクトを進めていきました。これにより、プロジェクト運営の調整がうまく機能していたと思います。私は業務調整担当として、どう人を回し、どう調整していくかを中心に仕事をしていきました。

現場の農業省スタッフの再教育システムをつくる

私たちがこのプロジェクトで実際にターゲットにしていたのは、現場に配属されている獣医（師）ばかりではなく、その下の獣医師補と呼ばれる最前線で活躍している人たちでした。その部分の教育がきちんとできていないと、病気のコントロールや生産性の向上が期待できないのです。

実際にこのレベルがどの程度なのかを、農業省は全く把握していませんでした。初めて現地のトレーニングを見学したときに私たちはかなり不安になりました。「このレベルでどうやって病気をコントロールしていくのか。これではできない」と、ザンビア大学や農業省の人も含めてその場にいた関係者はみんな思ったはずです。次のときには農業省の上層部も呼んで、現場を見せました。直接見せて、実態を把握してもらって、政府の人にも危機感を感じさせる必要があったのです。下からの意見を吸い上げるのはザンビア大学ではなく農業省です。ザンビア大学が現場からの意見を受けても、ザンビア大学としては対応ができません。農業省の上層部の人が見てからは少しずつ対応策がとられるようになりました。

最初のプロジェクトが25年前にスタートしたときに、ザンビア全土で獣医の数が全国で300名くらいになればいいという見通しでしたが、今は卒業生のうち200名程が農業省に

入省し活躍しています。しかしまだ充足したという感じではなく、まだまだ質量共に不足しているというのが実感です。

これまでは家畜防疫の最前線で動いている獣医師や獣医師補の再教育のシステムもなかったもので、現場に入っている獣医師や獣医師補の再教育は必要不可欠な課題だったのです。また農業省として、その職員の技術や農家指導能力等について掌握したりすることもしていなかったのです。

今回のプロジェクトでは、全体のトレーニングコースを8つのモジュール（項目）に分けています。8つのモジュールについて、それぞれのリソースパーソンと私とで内容を決定しました。教材開発では、私が見て理解できないような内容については現場でも理解できないという観点から、現場で必要のない知識、技術の部分をカットしながら進めました。ザンビア大学の教官が書くので、どうしてもアカデミックな感じが強いものになってしまいうのです。何度も会議を重ねて、私は口を酸っぱくして、「学術的なものはいらないから、もっと現場に即したものを」と言い続けました。

そして、モジュールによってはかなり高度なものもあったのですが、なんとか獣医師補が見てもわかるようなマニュアルが完成したのです。高度になってしまったところに関しては、逆に獣医師補がこれを勉強しようという動きも出てきました。これは意図していなかったこ

となのですが、高度な部分を残したことで、かえって現場の向上心につながったようでした。現場向けの教材開発では、「分かり易さ」と「理論より実践」をモットーに進めました。が、全部を噛み砕かず、少し刺激するようなものも入れておくのも一つの方法なのだということを学びました。

今回ラッキーだったのは、13年間の県職員経験がうまく活かされたことです。私は大学を卒業してすぐに栃木県庁に入庁しました。獣医として農家への指導にはずいぶん行きました。今回トレーニングのマニュアルを作成するにあたって、学術的なことを入れても現場レベルではわからないということを実際に照らし合わせて説明できましたし、日本の資料を見せて、こういう風に図や表を使って見



リビングストーンにおけるフィールド・トレーニング実習